十一　當振氣流其裏

互に前の反對ゑ取組み敵手より武士を脊負ひ抛けんとする時武士は左手と敵手の右手首に掛け右手は敵手の右肘へ引掛け左足を引き拔らきつゝ引倒す敵手仰向

十二　左右の違ひ

十三　清川流摺込み表

敵手右拳にて打込む武士は左足を敵手の右側へ踏込み體は右へ拔らき腰を割り低くなりて左手を矢筈にし敵手の腮を摺り上げ右手にて敵手の右大腿を外側より掬ひ倒し遣る敵手仰倒す

十五　當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より武士の腮を摺り右大腿を掬ひたる時武士は右足を浮へ左足にてチョンチョンと釣合を取りながら兩手にて敵手の左手首を握り吾が腮へ其手首を引付けつゝ身を替はし尙はチョンチョンと釣合を取りつゝ右肘尖にて敵手の左肘を逆に折り掛ける敵手稍々中腰に屈みて降參りの記號をなす

十六　左右の違ひ

振氣流練體柔術第七段之形

一　神明殺活流敵之先表

敵手右拳にて打掛る武士左腕にて受止め直に其左手にて敵手の右の二の腕を握り右肩を敵手の右腋の下へ付け同時に右足を敵手の右足の外側へ踏込み右手は敵手の右肩を掴み敵手を脊負ひ前方へ投ける敵手仰向

二　左右の違ひ

三　當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より武士を脊負はんとする時武士は早く身を沈めて腰を割り左足を引き拔らきつゝ左手にて敵手の腰椎部を押して折り掛けて體勢を崩し又其左手を敵手の左肩へ引掛け敵手を後方へ引倒す敵手仰向

四　左右の違ひ

五　良移心頭流帶引表

敵手右拳にて打掛る武士右手にて敵手の前帶を上へより掴み左足を踏込ひと同時に左手にて敵手の腮を張り右手にて帶を釣り上る敵手は眼橋の如くなりなから降參り

六　左右の違ひ

七　當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より武士の腮を張り帶を引く時武士は兩手にて敵手の右手首を握り兩足にて疊を踏む葉津美に兩手を利せて敵手の右手首を押し離して右足を引き右へ半猫回へりしすロの如くす

八　左右の違ひ

九　殺當流連行表

敵手は武士の右側に連行しつゝ右拳にて横に鼻に打掛る武士は左足を敵手の後方へ踏込ひと同時に左手にて敵手の後襟を取り右膝を疊につき右手にて敵手の右足を外より掬ひ敵手を後方へ引倒す敵手は一二歩跡退りつゝ仰倒す

十　左右の違ひ

十一　當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より右膝を疊につき武士を後へ引倒さんとする時武士はヨンチョンと左片足にて中心を取りつゝ右腕の肘尖にて敵手の左手首を拂ひ離す敵手は拂はれたるまゝ身を替はし四ッ這りす

十二　左右の違ひ

十三　伴吾流突込み表

敵手右拳にて武士の心窩へ突き來る武士は右足を引き左手にて敵手の右拳を己れの右へ拂ひ直に其左手にて敵手の右拇の方を逆に握り右手にて小指の方を逆に握り右足を

十四　左右の違ひ

踏込むと同時に敵手の右拳を高く差上げ又直に足を引きながら右膝を疊につき敵手の右手を家根板割に引付くる敵手片手四つ這りす

十五　當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より武士の右拳を差上げ右足を踏込みたる時武士は左足を進め又右足を踏込み左手にて敵手の後帶を取り右肘尖を其胸にあて丶突き進る敵手仰倒猫回へりす

振氣流練體柔術第八段之形

一　澁川流腰投け表

敵手は武士の右側より武士の兩腕の上より抱き付く武士は腰を割て沈み右手を敵手の後帶へ沿ひ廻はして引締め左手にて敵手の右肩を掴み右足を敵手の右足の内側へ踏移し腰を右へく字形に横突せしめ膕骨にて掬上げ抛け落す敵手仰向

二　左右の違ひ

三　當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より武士を腰投けにせんとする時武士は身を沈めつ丶敵手の前方へ飛出て互に飛出て互に飛出てしつ丶敵手の體勢崩れたる時右足を深く踏込み右手は胸を押し左手は後帶を引寄せる心持にて右手を押し倒す敵手仰倒猫回へりし立つ

四　左右の違ひ

五　楊心流壁副表

敵手右拳にて打掛る武士右足を踏出し右腕にて受止め直に左足を踏込むと同時に右手を敵手の右腕の上より捲き込み其手先きにて敵手の脊中の衣を掴み左手を敵手の左肩より入れて右襟を握り左足を引拔ちきなから左膝を疊につき敵手を引倒して其儘喉咽を固む

六　左右の違ひ

七　當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より武士を引倒し咽喉を固めんとする時武士は左手の拇指を敵手の左耳根にあて丶押し左足を屈めて敵手の右の二の腕へあて丶押し彈ね起る敵手後ろ右肩猫回へりし起る

八　左右の違ひ

九　天神眞楊流連柏子表

十　左右の違ひ

敵手右拳にて打掛る武士は敵手の右拳に注目せす直に左足を敵手の右足の後方へ踏込み左手の尺澤を敵手の前帶へ沿ひ其手先きを左腰へ捲付け右手を敵手の右大腿に外側より掬ひ抱き上けて後方へ振り廻はしつゝ抛け落す敵手仰向

十一　當振氣流其裏

十二　左右の違ひ

互に前の反對に取組み敵手より武士を抱上けんとする時武士は腰を割り身を沈めて踏み耐へ右手を敵手の右頸側より入れて腿へ引掛け一旦敵手を押へ付けて體勢を崩しつつ吾が右足を引脱きながら後方へ引拔らきつゝ右膝を疊につくと同時に右手にて敵手の腿を引寄せ吾が右膝の上へ倒し込み左拳にて打つ擬勢をなす敵手仰向（降參り）

十三　起倒流引落表

十四　左右の違ひ

武士進みて右手にて敵手の左襟を取り左手にて其右袖を取り敵手亦同じく襟袖を取る武士は三四歩後方へ敵手を引出し來りつゝ敵手が左足を踏移さんと浮き上けたる途端に武士は俄かに充分に左足を引き其膝を疊につきなら敵手を引倒す敵手左手にて反動を取る樣に仰向す

十五　當振氣流其裏

十六　左右の違ひ

互に前の反對に取組み敵手より左膝を疊につきたる時武士は兩手にて敵手の右の二の腕を握り釣り鐘の技の如く右方へ半ば猫回へりし蹴り起り羽伏せに固ひ（釣鐘の如く左足を引くに及はす踏出したる儘にて可也）

振氣流練體柔術第九段之形

此第九段は第六第七第八段の技を早繼ぎにする事第四段に於けるが如し故に四ッ這り又は仰向等總べて猫回へりし起るべし但し最後の羽伏せはかたひ

〇一二胸倉取り表〇三四其裏〇五六腕止め表〇七八其裏〇九十襟投表〇十一十二其裏〇十三十四摺込〇十五十六其裏〇十七十八敵之先〇十九二十其裏〇二十一二十二帶引〇二十三二十四其裏〇二十五二十六連行〇二十七二十八其裏〇二十九三十突込〇三十一三十二其裏〇三十三三十四腰投〇三十五三十六其裏〇三十七三十八壁副〇三十九四十其裏〇四十一四十二連拍子〇四十三四十四其裏〇四十五四十六引落〇四十七四十八其裏

振氣流練體柔術第十段之形

此第十段は　日本武尊の時代に行はれたるつるぎに擬したる拵への佩刀を用ゆ

一　柄搦み振り返へし

敵手兩手にて武士の柄を握る武士は左拇指を鍔よ掛け（以下皆準之）右手を敵手の兩手の下より入れて柄頭を握り右方へ引廻はし上げ右足を踏込み柄にて敵手の兩手を已れの左下へ振り離し更に武士は兩手にて敵手の左腕を握り右足を引拔らく敵手は右手の掌を左腋へ添ゆ武士は右足の蹠にて敵手の左腋に在る其右手の甲を蹴り又直に右肩にて敵手を擔ぎ上る爪持に右手を差して敵手の浮きたる時右踵を敵手の左足の脛前へ引掛け倒して羽伏せにし右足を羽伏の中に踏込み敵手の左の二の腕を踏み押へ其左手首を吾が右脛前へ入れ右膝を屈める如くし羽伏にかたむ敵手は右手の手刀にて武士の右側面を打んとす武士は右手を伸ばしたるまゝ其腕にて之を受止め敵手の右手首を捻りて吾が右脛前へ入れ右手の拇頭にて胛下を押へる敵手降參り

二　柄搦み掬ひ戻し

敵手兩手にて武士の柄を握る武士は右手を柄の下より敵手の拳共に握り固め己れの左方へ引廻はし敵手の兩手首を交叉する樣にし左足を踏込み柄にて敵手の兩手を振ち離し更に兩手にて敵手の右腕を握り左足の蹠にて蹴る以下前と左右の逸ひ

六　柄搦み板割り

敵手は武士の左側へ行逸ひに進み左手にて柄を握り右手にて鞘を握る武士は兩手にて柄共に敵手の左手を握り左足を引きつゝ左膝を疊につき敵手の左手を板割りの如くに引付け固む敵手片四ッ這りす

四　柄握り潜りて羽伏せかため

敵手は武士の左側へ逸行し左手にて柄を握り右手を鞘に掛る武士は右手にて敵手の左手首を握り左手は敵手の左手の尺澤を握り兩足を入替へつゝ外方より敵手の左腕の下を潜り脱け捻ぢ掛けつゝ右足を踏込み倒して羽伏せにし左膝を疊につく敵手仰向

五　鬢摺り倒し門ぬきかため

敵手は武士の右側へ逸行し右手にて武士の柄を握り左手にて武士の鞘を握る武士は稍

稍腰を割り右足を敵手の右側へ踏込むと同時に左手は敵手の右腕を捲き締め右手は四指の指頭に力を入れ敵手の左鬢を摺り倒す敵手仰向武士は右手にて逆に敵手の右手首を握り左足を敵手の肩の側へ置き左手にて鞘を吾が下腹へ横たへ右足を敵手の腹上へ乗せ両手にて敵手の右腕を吾が両股へ引込み左足も寄せて之を挾み腹を張り上げて眼橋の如くす此の技は劍術試合に應用し易きものなり尤も劍術試合の際敵を倒すには鬢摺り足搦み等皆同一の理由にして極高く摺り倒すか極低く土際を拂ひ倒すかに利ありとす

三　羽伏せ蹴り

敵手は武士の後方より進み俄かに武士の右側へ飛出つゝ大抱きに抱付く武士は右肘を張り右肩を低く落し敵手の右腕を吾が右肩の上に擔ぐ如くし第二段の初本の如く右足にて蹴り纏て左足にて蹴り右膝を疊につきながらかたむ敵手片四ッ這り

七　後抱き顎彈ね

敵手は武士の後方より吾か頭首を武士の右腋下へ入れつゝ抱付く武士は腰を割り身を

沈め左手の拇指は鍔に掛け右手を脱きて敵手の右肩の方より其顎へ其右手先きを引掛け右足を後方へ引拔らくと同時に顎を引倒す敵手は必らず齒を嚙み締め居るべし武士敵手稍々遠距離に分かる敵手の起き上らんとする迄は武士は柄に右手を掛けて扣へ居り敵手の起き上らんとする時武士は飛込み己れの右手の尺澤にて敵手の咽喉を捲き締めつゝ右膝を疊につき其左手は敵手の左手首を握り吾か左腰部にて折り掛る敵手片足を拍て降參り

八　前抱き先王の遺法拔き打ち

敵手は武士の正面より武士の右腋下へ頭首を入れ武士の腰へ大抱きに抱付く武士は左拇指を鍔に掛け腰を割り右足を引拔らき右手の掌を敵手の額にあてゝ摺り上げつゝ左足の甲を敵手の右足へ鎌掛けに引掛け額を押し倒す敵手仰倒猫回へりし起る武士右拳にて打込む敵手左腕にて受止め直に脊負ひ投げんとす武士は右手を利せ右足を引拔き引倒す敵手仰倒猫回へりし立て逃げんとす武士は右手にて敵手の後襟を取り身を替はして脊と脊を合せ右手を利せて吾が前面へ投出す敵手蜻蛉回へりし又直に武士の右

腰を見掛け飛ひ來る（注意武士の拔打に觸れざる樣側方へ飛込ひべし）武士は先王の遺法拔きに逆に拔付ける敵手仰倒猫回へりし立ち（先王の遺法拔きとは、日本武尊の遺法にして武人の崇稱する「つるぎ」拔き是れなり其法は左手にて鯉口を握り右手にて鍔際を握り拔きつゝ左手にて鞘を拂ひ左足を踏込ひと同時に左手にて柄頭を握り敵の胸通りを逆に切り上げ右拳を轉回し矢字構へに取り右足を踏込み太刀を茶巾シボリに刀尖高く手元低く切込み氣當りす敵手は傍らに置し在る太刀を取て精眼に構ゆ武士亦精眼に構へ其刀尖を敵刀の左右へ長圓形にうねりつゝ吾が體共に敵刀の左外へ避けて摺り込み又敵刀の右外へ移つて賺し込み稍々兩三次之を行ひ敵をして吾が位地の在る所を定めさせずして敵刀の右外へ賺し込み吾が體に根さして右肘を引きなから吾か刀の峯にて敵手の刀の峯を打拔らきつゝ兩足を摺込み稍々拳を轉回し刀及にて敵手の右腕の中頃ろを輕く打つ敵手少しく跡退りす武士復た刀峯にて打拔らき摺り込み右腕を打つ敵手跡退りす斯の如くすること概三四回に及ふ時敵手太刀を左八相に取る武士は敵手の左八相に取るに連れて摺込み相接してツット左足を敵手の右足の外側より右踵に觸れぬ樣に廻はし置き太刀は敵手の左八相に構へたる中柄を押へ付け太刀先きに力を入れ摺り倒す心持にて押す敵手跡退りせんとして右足の浮き上りたる時武士は始めて吾が左足の甲にて鎌掛けに引くと吾が太刀先きにて摺り倒すと同時にす敵手仰倒猫回へりし立て復た精眼にて立向ふ是より以下互に第五段の十貳本目の初の如くす即ち敵手より摺込み打に依り武士は右片手にて受けて頸窩を引切り脫けて遠く避け左手を添へ精眼に構へんとす敵手復た右足を前にしたるまゝ摺込み打來る武士は初の反對に刀尖を吾が左方へ斜めに受けて敵手の右腋より左腋へ掛けて心窩を引切り脫ける敵手復た精眼に構ゆ武士は太刀を右片手精眼に構へ平生に歩み往く如く一歩も駐めず刀尖を長圓形にうねりつゝ第五段の十三本目を應用す敵手は捨身に彈ねられたるまゝにて仰向し居る武士は捨身に彈ね遣りて稍々小形に後ろ左肩猫回へりし起て驅け寄りつゝ片足を上け右肘を後へ引き稍々高く上けて突く擬勢をなす敵手降參り

此第十段の試驗は第五段同樣劍術道具着用にて之を行ふ

振氣流練體柔術第十一段之形

一　浮足掬ひ表

互に左足を踏出し左手にて右襟を取り右手にて左袖を攫み武士は己れの右方へ敵手を引廻はしつゝ敵手が左足を踏移さんとし浮きたる途端を右足にて掬ひ倒す敵手仰向す

二　左右の違ひ

三　浮足掬ひ裏

敵手より表の如くし武士を引廻はし武士の左足を掬ひたる時武士は其應し返しを利用して以て己れの胛間背部を敵手の兩脛前へ打付くる樣に己れの體を捻りて敵手の右側より背面の方へ倒れると同時に兩手を利せ際疾く引付け投る敵手左肩猫回へりす

四　左右の違ひ

五　虛實掬ひ表

互に右足を踏出し右手にて頸側の左襟を取り左手にて右袖を攫み武士は敵手を己れの右方へ引廻はしつゝ右足にてチョッと掬ひ掛け敵手の右足の動く途端を左足にて疊を摺りながら掬ひ倒す敵手仰向

六　左右の違ひ

七　虛實掬ひ裏

敵手より前に武士のなせし如くす武士は其掬ひ倒さるゝを利用し應し返すこと浮足掬ひの裏の如くす

八　左右の違ひ

九　內股掬ひ表

互に左足を踏出し左手にて右襟を取り右手にて左袖を取り武士は敵手を己れの右方へ引廻はしつゝ敵手が跨がり過きたる時左膝を屈めて敵手の兩足間へ入れ左髖骨を左へく字形にし左髖骨乃至左大腿部にて(兩足は疊に踏付けたるまゝ)敵手の稍々右股を掬ひ上げて吾か前面乃至右側の方へ投げ落す敵手仰向

十　左右の違ひ

十一　內股掬ひ裏

敵手より武士のなせし如く掬ひ上げ前面へ投げ落す時武士は兩手を利せ殊に右手を際疾く引付け投る敵手左肩猫回へりす

十二　左右の違ひ

十三　送足外掛け表

互に左足を踏出し左手にて右襟を取り右手にて左袖を取り武士はチョッと右足を進め左足を送り其左踵を敵手の左足の外側より敵手の左踵に引掛け兩手を利せて押し倒す敵手仰向

十四　左右の違ひ

十五　送足外掛け裏　　十六　左右の違ひ

敵手より武士のなせし如くす武士は浮足掬ひの裏を應用す

十七　送足内掛け表　　十八　左右の違ひ

前の如くし武士は右足を進め込めつゝ左踵にて敵手の左足を内側より其左膝腮に引掛け兩手を利せて前方へ押し倒す敵手仰倒猫回へりし立つ

十九　送足内掛け裏　　二十　左右の違ひ

敵手より武士のなせし如くし押し倒さんとする時武士は左足を縮めて敵手の耻骨にあてゝ眞捨身に彈ね遣る敵手猫回へりす

振氣流練體柔術第十二段之形

一　く字投け表　　二　左右の違ひ

互に左足を踏出し左手にて右襟を握り右手にて左袖を握り武士は敵手を已れの右方へ引廻はしつゝ敵手が兩足を一線上に踏揃へたる時武士は襟の手を放ち其左手の尺澤を敵手の後ろ帶へ沿ひ廻はし己れの左足を敵手の左足の趾前へ踏込み膝を屈め腰を右へ

く字形にし臍骨にて敵手の兩足の疊を離れる樣に掬ひ上げ前面へ投け落す敵手仰向

注意　未熟の輩は振り投けんとするが故に己も亦共倒れす圖點を見るべし

幼年は第十一段の內股掬ひ表を應用し習ふて自然に體勢の整ひたる後に之を行ふべし

三　く字投け裏

敵手より武士のなせし如くし掬ひ上けんとする時武士は右手の拇指を入れて敵手の後頸の襟を握り左手は掌を敵手の腹部へあてゝ投けらるゝを利用し際疾く襟を引くと同時に腹部も押して投げ返へす敵手左肩猫回へりす

四　左右の違ひ

五　絹擔き表

互に前の表の如く取組み武士よりく字投けにせんとする時敵手は兩足を踏揃へ體勢を眞直にし下腹を張り武士の腰を押出す武士は兩足を入替へると同時に巳れの頸を敵手の左下脇へ接して左手の尺澤を敵手の左股へ入れ右手は敵手の左肩を攫みたるまゝに し深く左足を踏込み腰を割り兩手を利せ敵手を吾が脊に横に擔く樣に引付けて立つ敵手は擔かれながら降參りの記號をなす熟練すれは投け落す敵手仰向

六　左右の違ひ

七　絹擔き裏

敵手より武士のなせし如くしく字投けにせんとする時武士は左手にて敵手の腰椎を押し潰す敵手は左手を武士の左股へ掛け兩足を入替んとする時武士は左膝を疊につき兩手にて敵手の後腰を抱き立上りつゝ抱き上げ敵手を吾が右側後方へ投け落すと同時に右足を引披らき且敵手に引倒されぬ樣に腰を据ゆ

八　左右の違ひ

九　互ひ頸襟表

互に右足を踏出し右手にて拇指を入れて右頸の襟を摑み縱長線形に取組み武士は充分に右腕の肘を下け敵手の右頸の襟を下へ引付け引付け挑みて敵手の體勢を崩し直に己れの頭首を敵手の右腕と己れの右腕との各尺澤の間に左手と共に差込み其左手の尺澤にて敵手の首を捲き左足を敵手の左足の趾前へ踏込み左の膝頭を吾が右へ屈め向け腹骨を吾が右へ横突せしめく字投けに投る敵手仰向

十　左右の違ひ

十一　互ひ頸襟裏

敵手より武士のなせし如くしく字投けにせんとする時武士は已れの腰を敵手の腰より

低くして敵手を引き連れ往く勢ひにて敵手の前方へ飛出て右足を敵手の右足の趾前へ踏み込み其右膝頭は吾が左へ屈め向け右手の尺澤は敵手の後帶へ沿ひ締付けく字投けに投る敵手仰向

十二　左右の違ひ

十三　外無双表

互に前の表の如く取組み互に押し合ふ内に武士は左手にて敵手の右の二の腕を摑み敵手より押し來る途端に兩足を引退りつゝ身を替はし敵手の右腕を右肩口に引乘せ右拳にて敵手の右足をはたき落す敵手仰向

十四　左右の違ひ

十五　外無双裏

敵手より武士のなせし如くし武士を右肩口に引乘せ引摺り往く武士は敵手より先き立つ心持にて敵手の前へ右足を踏込み右手の尺澤にて敵手の首を捲き締め左手の尺澤にて内側より敵手の右股を掬ひ上げ投け遣る敵手左肩猫回りす

十六　左右の違ひ

十七　立締の解き表

敵手は直に兩手を交叉しながら武士の兩襟を取り咽喉を締る武士は左手を敵手の兩手

の間に下より割り入れて伸はし左足も踏込み左肩を敵手の兩手の中に割り入れて咽喉の兩手を離し更に左足を脱きて敵手の右足の外側より後方へ踏込み左手の尺澤を敵手の前帶へ沿ひ捲き締め右手は敵手の右大腿部へ捲き添へ已れの左髖骨へ敵手を掬ひ乘せ後ろへ振り廻はしつゝ投落す敵手仰向

十九　立締の解き裏　二十　左右の違ひ

武士より敵手のなせし如く兩手を交叉し咽喉を締ひ敵手亦武士の前になせし如く左手を入れて其頭髪は攫ます敵手の右肩へ吾が左手を延せし込み左肩にて咽喉の兩手を離す更に武士は右足を踏込み左手にて敵手の右の二の腕を攫み吾が右肩口にて敵手を擔き樣に左手も添へて敵手を前へ倒し仰向せしめ左脛を枕らさせ左手にて仰向せる敵手の左襟を握り右手にて敵手を吾が左脛へ引上げつゝ左腕の骨にて咽喉を締ひ敵手は片足を上げ居りて降參りの記號をなすべし決して口上にて降參りなどゝ云ふ可らす

振氣流練體柔術第十三段之形

一　眞捨身表　二　左右の違ひ

此の眞捨身の技は相撲にも諸流にも未た曾て其類を見さる所にして捨身（シャシン）の意味を云へは勇決果斷の謂ひなり機（ヒ）を見て思ひ切て吊鐵棒を潜る如くに五體を縮め兩手にて敵手の兩頸の襟を引寄せる時吾が兩肘を吾が乳部へ締め寄せ片膝を兩肘の間に挾み其趾蹠は必らす敵手の耻骨に向け天井板を蹴り拔く心持に彈ねて敵手を回轉せしむ之り込むと引くと彈ると三呼吸一致を要す故に先つ武士は兩手にて敵手の兩頸の襟を取り敵手は兩手を武士の兩袖の上に添へ居り少しく押し掛る武士は敵手の押し掛る機會を利用し右足を敵手の股間に辷り込むと同時に左膝は兩肘の間に挾み其左趾蹠は必らす敵手の耻骨に向け兩襟を引寄せると同時に耻骨を彈る敵手猫回へりす回轉若くは狐飛ひせんと欲する時は豫しめ武士に約束し置くべし

二　眞捨身脱け　四　左右の違ひ

敵手は武士のなせし如くし彈る武士は總身をやわらかにし上體を低くし蜻蛉回へりし脱ける蜻蛉回へりは大字回へりとも書す先つ吾が右手を仰向せる敵手の左肩の側へつき兩足を踏切て左手を二三尺前方へつき左足を其左手のつきたる所より二三尺前方へ

卸ろし又右足を左足より一二尺前方へ卸ろし直立す是れは總身を柔らかにし上體を低く傾ける二要領より成立するものなり又蜻蛉回りは總へて兩肘を多少く字形につくへし

五　斜め捨身表

敵手より進み往き互に左下手に組み押し合ひつゝ武士は右手にて敵手の左の二の腕を捲く心持に握り込みて其左腋下の袖を掴み左手は敵手の右腰へ添へ上體を敵手の右側後方へ傾けなから左足をチョッチョッと移しつゝ敵手を引き傾けさせなから全く反對の位地に向きつゝ右足の踵を敵手の左蹠部にあてゝ彈ると同時に右手を利せ投る敵手は左肩猫回へりす但し敵手は塲の廣き方向に猫回へりし往くへし

六　左右の違ひ

七　斜め捨身脱け

武士より進み往き互に左下手に組み敵手は武士のなせし如くし彈る時武士は右手を仰向せる敵手の左肩若くは左肘の邊へつき蜻蛉回へりす

八　左右の違ひ

九　横捨身表

十　左右の違ひ

互に左袖を取り右襟を握り武士は少しく押し立てつゝ左足を敵手の右足の内側より外方へ捩り退る樣に踏込み其浮きたる時右足を延はして敵手の左足の外側を掬ひ自ら箕踞仰倒しながら兩手を利せて吾が右側へ敵手をリ字形に並ふ樣に引倒す敵手亦武士の右側へ刊字形に並ひ仰向する樣に武士の右足を飛び透して右手にて反動を取るべし

十一　横捨身脱け

敵手は武士のなせし如くし引倒さんとする時武士は總身を柔らかにし腰を据へ前へ凭倚して右手を仰向せる敵手の左肩の方へつき蜻蛉回へりす

十二　左右の違ひ

十三　蟹捨身表

敵手は右手にて武士の左襟を掴む武士は敵手の右側へ並ひ縦長線形をなす樣に披らきつゝ左手にて敵手の後襟を握り左足は敵手の前大腿部へ右足は敵手の後ろ腿みへ挾む樣に飛び付き左手の後襟を利せ引倒す敵手仰向

十四　左右の違ひ

十五　蟹捨身脱け

武士は敵手のなせし如くす敵手亦武士のなせし如くし武士を挾まんとす武士はナ＝ヒ

十六　左右の違ひ

ト飛退り總身を柔らかにし腰を据へ前へ凭倚して右手を半バ仰向せる敵手の背の方へつき蜻蛉回へりす

十七　海老捨身表

互に左足を踏出し左手にて右襟を取り右手にて左袖を取り武士はチョッと右足を進め左足を送り其左踵を敵手の左足の外側より敵手の左踵に引掛ける敵手之を外さんとして左足を浮き上けたる時武士は左足をチョッと引き踏付けつゝ右足を延はし敵手の左足の外側を掬ひ箕踞仰倒しつゝ兩手を刹せ吾が右側へ敵手を刂字形に引倒す（横捨身の如ぐし）

十八　左右の違ひ

十九　海老捨身脱け

敵手は武士のなせし如くし引倒さんとする時武士は横捨身脱けの如くす

此の終りには呼出し應用を修練すへし敵手は交互錯綜に活音にて浮足の裏、内股の裏、く字の裏、絹擣の表（裏）、眞捨身の表（裏）、横捨身の表（裏）、蟹捨身の表（裏）、又は足の技、く字の技、捨身の技と云ふ如く呼び出す是れなり此の呼出しは熟練したる上

二十　左右の違ひ

は默して面てし敵手は之れが機會を作り與へて其機會に應ずる技を練磨せしむるものとす

但し外來將校の爲めに甲之を呼び乙丙之れに應じ暗々裡に技と名稱とを告る事あり

相撲にてもショッキリと唱へ四十八手を交互雜出し手の盡きたる者眞に投げられたる如く自ら倒れて敗を表せり敢て之れに倣ふにあらずと雖夫れから夫れと技を競ひて技の盡きたる者を審判官に於て敗となすべし然る時は練體柔術の形の應用たる亂取の主旨に適す但だ眞に迫て約束なき如く仕向けるを要す尤も戯笑を嚴禁す所謂未來將校たる良心に訴ふれバ假りにも武道場に於て戯笑を漏らす事あるべき筈なきなり若し苟しくも之れあるに於ては未來將校たる志操の不確實なるものとし飭厲し尚ほ再三に及ぶ者は處罰す

振氣流練體柔術第十四段之形

此第十四段は第十一第十二第十三段の技を早繼きにす

一二浮足掬ひ○三四其裏○五六だまし掬ひ○七八其裏○九十内股○十一十二其裏○十三

十四送足外掛〇十五十六其裏〇十七十八送足内掛〇十九二十其裏〇二十一二十二く字投〇二十三二十四其裏〇二十五二十六絹擔ぎ〇二十七二十八其裏〇二十九三十互頸襟〇三十一三十二其裏〇三十三三十四外無双〇三十五三十六其裏〇三十七三十八立締解〇三十九四十其裏〇四十一四十二眞捨身〇四十三四十四其脫け〇四十五四十六斜捨身〇四十七四十八其脫け〇四十九五十横捨身〇五十一五十二其脫け〇五十三五十四蟹捨身〇五十五五十六其脫け〇五十七五十八海老捨身〇五十九六十其脫け〇競技試合

振氣流練體柔術第十五段之形

此第十五段は小太刀にて身邊を廻り四本毎に小太刀を授受し演練す

一　眞向

敵手は小太刀を帶し武士を拔打に切る武士は賺して飛違へ込み敵手の右側へ並び右手にて敵手の右手首を握り左手を敵手の右の二の腕へ掛け左肩にて敵手の右肩へ當り敵手の體勢を崩しつゝ右手にて敵手の刀柄を握り奪ふと同時に左手を利せて前へ押し離す敵手右肩猫回へりす武士一歩摺り進み突く氣勢をなす以下皆準之

二　右側

武士は敵手の右側に連行す敵手は武士に切付る武士は身を低くし左手を矢筈にし敵手の右の二の腕を止め右手にて敵手の右手首を握り左手を鎌掛けに敵手の右の二の腕の内側へ引掛け少しく左足を踏込み前の眞向の如くし小太刀を奪ひつゝ一旦前へ押へて體勢を崩し左足を引拔ちきつゝ後方へ鎌を利せて敵手を彈ね遣る敵手後ろ猫回り立つ

三　後方

武士は敵手の後方より矢と掛聲をなす敵手右へ振り返て武士へ切付る武士は之を賺しつ身を替はし左足を前へにし右向きになり左手にて敵手の右手首を握り右手を添へ兩手にて屋根板割りにし左足を引く敵手は右肩にて小形に猫回へりし逃んとす武士は右足にて敵手の右側面を蹴る擬勢をなす敵手又大形に右肩猫回へりし去る武士刀を奪ふ前同斷

四　左側

武士は敵手の左側へ連行す敵手は逆右手に刀柄を取り武士を突んとす武士はナヨッと

右手にて敵手の左肩を押し遣りつゝ右足を敵手の右踵の後へ踏移し右手にて敵手の右手首を握ると同時に左手は敵手の右肩上より敵手の右の前襟を掴み立ちながら引付けて咽喉をかたむ此終りに敵手は小太刀を武士へ渡す武士は受けて之を帶す

五　眞向

敵手は兩手にて武士の右手首と柄を握る武士は左手の拇指にて鍔へ押へ腰を割り兩肘を下け兩拳を寄せ已れの胸へ引付けて敵手の兩手を離し右足を踏込むと同時に拔打にす敵手二三歩跡退りつゝ後ろ猫回へりし立つ

六　右側

武士は武士の右側に進行し左手よて逆に武士の柄頭を握る武士は敵手の握りたる上へを兩手にて覆ひ握り右足を引拔らき疊につきつゝ敵手の左手首を吾か柄にてかたむ敵手は倒れて仰向す

七　後方

敵手は武士の後方より進み武士の右肩を越して右手にて柄を握り左手にて鞘を握る武士は兩手を鍔に掛け腰を割り右肩を聳へて兩手を下へ押し離す又直に右手にて逆よ刀柄を握り拔き右脇より右足を移すと同時に敵手を突く敵手二三歩跡退り後ち猫回へりす

八　左側

敵手は武士の左側へ進行し左手にて武士の刀柄を握る武士は左手の拇指にて敵手の四指を押へ柄頭を覆ひ握り右手にて其柄の下面より拇指にて敵手の四指を押へ左足を引拔き左膝を疊につき板割りにかたむ敵手左肩猫回へりし去て第十段の八本目の如く傍らに置し在る太刀を取り精眼に構ゆ武士亦夢見要領を擴充し一歩も駐らすうねり往き吾か太刀にて敵手の太刀を敵手の右方へ押へ付けつゝ敵手の右拳を下へ左拳を上へ刀尖を地へ垂直に一線糸を下げたる如くし柄に左手を添へ其寸口を右腕へ接し右足を敵手の左側外へ摺込みつゝ敵手をして飛び退く暇さあらしめす疾くに彈ねて敵手の左方なる天井と板壁の間に飛はし遣る敵手は右足を武士の左側へ踏込み身を替はして塲の廣き方へ三四歩跡退りつゝ仰倒す武士は敵手を追驅け往て仰向せる敵手の左側へ廻り

吾か左膝を敵手の左脇の疊につき左手を敵手の右肩の疊につく敵手は兩手にて武士の左甲部の邊を押しつゝ其腋下を辷り脱け左脇を下たにし四つ這り起きつゝ右手にて武士の右肩を引て仰向せしめ直に敵手は傍らにある太刀を取り兵字に搆へ武士の身を翻して起らんとするを待ち其後ろ首を打つ擬勢をなす武士は臀部を軸にし廻つて之を受止め直に立上る敵手は精眼に搆へ徐々跡退りす武士は攻々詰め掛けつ敵手を壁へ攻め詰めて第五段の敵何になりとも應用すへし

振氣流練體柔術第十六段之形

一　片手胸倉表　　二　左右の違ひ

敵手武士互に進逐ひ敵手は右手にて武士の左襟を掴み左肘を下げ稍々差し立る武士は腰を据へ充分に抗し堪へ敵手に差し立てらるゝに依り上体を吾が左方へ傾け右肩を敵手の右手首の下面より入れて右足を踏込み右肘尖を高く上けつゝ三四歩押し出て離す（尚は離れされは左手にて己れの右腕の肘を押し上け）武士は繼て兩足を入替へ敵手の右手首を握り左手は敵手の右腋下より入れて則首に引掛け腰を据へなかち引拔きつつ兩手を利せ宙回へりせしむ敵手は踏切て回轉仰向す武士は敵手の右腕を捲き其腋袖を握り引上けて左足の脛前へ枕らさせ左手にて仰向せる敵手の左襟を深く握り込み引寄せる心持にて咽喉をかたむ敵手は片足を上け居るべし

三　片手胸倉裏　　四　左右の違ひ

互に前の反對に取組み敵手より武士の則首を引く時武士は左手にて遊に敵手の右襟を取り左足を敵手の股間へ蹴込みつゝ箕踞仰向し敵手を引仕く敵手は武士の頭の方へ飛渡りて猫回へりの心持にて回轉し仰向す武士は左方へ起きて左膝をつき右膝を立て兩手を交叉し敵手の左襟は深く右襟は淺く握り込み咽喉を締む敵手は片足を上げ居るべし

五　互胸倉表　　六　左右の違ひ

互に左手にて右襟を握り左足を踏出して武士は右手の手刀にて敵手の左手の小指の方へあて摺り離す樣にし俄かに体を右後ろへ引捻ると同時に胸部を張り敵手の左手を離す敵手更に右拳にて武士の頭へ打込むと同時に右足を踏込む武士は左手に襟を握りた

るまゝ差して左肘尖を高く上る心持にて兩足を進めつゝ左足を敵手の右外側の後方へ踏込み左腕にて敵手の腋下より攻め上げて敵手の右拳を防き吾か左拳を吾か右乳へ引き復た其左肘尖にて敵手の脇腹へ當る擬勢をなすと同時に右掌にて敵手の左腿を掬ひ進る敵手後ろ猫回へりし立つ

七　互胸倉裏

互に前の反對にし敵手は左肘尖にて當るへきを當らす直に其左足を武士の後側へ深く踏込み左手を武士の後ろより左肩へ掛け右手を武士の右腿に掛け抱き上る武士は右手の尺澤にて敵手の頸首を搦く敵手は徐ろに武士を卸ろす武士は第五段の十本目の如く左肘と兩膝を疊につき敵手を吾か穹窿の下へ捲き回へし込み其まゝ押へ付る

八　左右の違ひ

九　後抱表

敵手は武士の右側より後へ廻り武士の兩腕の上より抱く武士は兩腕をく字に張りつゝ腰を割り右肩を落して低くなりつゝ右膝をつき右手にて敵手の右肩の衣を掴み左足は敵手の兩足の間に伸ばし込み左掌にて敵手の左腿を掬ひ敵手を脊負ひ吾か上体を前へ

十　左右の違ひ

低くなると同時に兩手を利せ投け遣る敵手右肩猫回へりす

十一　後抱裏

互に前の反對に取組み敵手は武士を投けんとし右膝をつきたる時武士亦同時に右膝をつき左膝を立て腰を据へ敵手を後方へ引付け右手の尺澤を敵手の腮下へ捲込み其吾か右手の四指吾か左の二の腕へ掛け左手の指頭にて敵手の頭を前方へ押へる但し腮を縮め防く時は左手にてチョッと額を引起すものとす

十二　左右の違ひ

十三　抱上げ落し表

武士は敵手の右側より後へ廻はり抱き付き腹力にて敵手を彈ね上げ左足を引拔きつつ左方へ落す敵手仰向

十四　左右の違ひ

十五　抱上げ落し裏

武士は敵手の右側より後へ廻り兩手にて敵手の兩肩を拍ち敵手の物に驚き浮きたる兩足を吾か兩腕にて抱き上げ左方へ倒す敵手仰向

十六　左右の違ひ

十七　鬢摺り倒し表

十八　左右の違ひ

武士は行逢ふ途端に右足を敵手の右足の外側に踏込むと同時に右手の四指の指頭にて敵手の左鬢を摺り捻る様に摺り込みつゝ左手は敵手の右腕を越して其後帶へ掛け右手にて摺り捻ると右大腿骨を利せ敵手を吾か左方へ倒す敵手仰向（劍術にて足搦みと云ふは皆此の應用なりと知れ）

十九　鬢摺り倒し裏　二十　左右の違ひ

互に表の如く取組み武士より敵手の鬢に摺込む時敵手は力を首に入れ頭を其摺り込まるゝ方へ捻り傾く武士は左手にて敵手の腿（此の時より敵手は糸切り歯を嚙締め居るへし）へ搦みつゝ兩足を入替へ一旦敵手を押へ付け體勢を崩して已れの左足を引拔らきなから敵手の腿を引倒す敵手仰向

二十一　前抱き付き表　二十二　左右の違ひ

敵手は武士の正面より武士の右腋下へ頭を入れ兩手にて武士の腰を抱き締る武士は腰を割りつゝ腰を後方へ退け左右へ腰を振り動がしつゝ兩腕にて敵手の兩肩より其兩腕を締め付け敵手の兩手の緩みたる時武士は胸にて敵手を押へ左足を踏込左手の四指の甲を下たにし敵手の脇中の帶を掬ひ握り其左肘尖を胛下腰側へ捩り込むと同時に右掌にて敵手の前額を摺り上げ倒す敵手は先つ潰されて仰向するものとす

二十三　前抱付き裏　二十四　左右の違ひ

互に前の反對に取組み敵手は武士の額を摺り上る武士は寸口釣鐘の技を應用し兩手にて敵手の右手首を握り右足を引き右方へ半々猫回へりし右足を縮めて敵手の右腕へ搦ひ蹴り延はし起り羽伏せにかたむ敵手は蹴られぬ様にツムケて四ッ這りす

二十五　兩手握り振離し表　二十六　左右の違ひ

敵手進んで武士の兩手首を握る武士は腰を割り兩腕を眞直に下けて兩肘を合せ兩拳を敵手の右腕の下面より吾か左肩の方へ突き上げ其儘に（兩肘を下けたるまゝ）腰を割り又敵手の左腕の下面より吾が右方の方へ突き上げ離して吾が右手を矢筈にて敵手の左手首を握り左手は諸爪を下たにし敵手の左拳を覆ひ握り其拳を高く引上げ右肘尖にて敵手の左肘を折り掛け稍々引摺りて吾が右膝をつきかたむ敵手四ッ這りす

二十七　兩手握り振り裏　二十八　左右の違ひ

敵手前の如くす敵士腰を割り兩肘を合せ肘拳を敵手の兩腕の中へ眞直く突き上げ離す

更に武士は兩手にて敵手の右肩の衣と腕を掴み右踵を敵手の右足の趾前へ踏移し素早く身を替はして敵手を背負ひ上體を傾けながら前へ投る敵手は左手を矢筈にし武士の左脇へ添へ己れより押して回轉し又は左手にて楫を取る心持に敵手の左脇を摺り沿ひて回轉し前面へ落ちて仰向するものとす

二十九　片手握り突き離し表　三十　左右の違ひ

敵手進んで兩手にて武士の右片手首を握る武士は腰を割り右腕を垂直に下げ右足を敵手の兩足間へ深く左手を敵手の後帶へ添へ一旦右肩を低くして其右肩にて敵手の胸部を押し立てつゝ右手を突き離す更に武士は敵手へ背面を向けざる樣に左足を敵手の右側外へ移し廻はれ右の如くし跡退りし遠距離より驅け込み左肩にて敵手の右脚へ當らんとし四つ遣りす敵手は輕く右足を脱き二三歩ヂョンヂョン跡退りつゝ猫回へりし立つ

三十一　片手握り突き離し裏　三十二　左右の違ひ

互に前の如く取組み武士驅け込み來る時敵手は早く右足を脱き稍々左側へ飛避け右膝をつきつゝ右拳にて武士の鼻を横より打掛る武士は兩腕にて敵手の右腕を抱き込み一旦左肩にて押へ直に引起して後ろへ共に猫回へりし武士は早く敵手の右腕を潜り脱け起きて敵手の猫回へり起るを待ち其右腕を羽伏せにかたむ敵手片四つ遣りす

此の段の終りに眞捨身專修として幾回も眞捨身を專修すべし武士は先つ兩手にて敵手兩頸　襟を取り左足を辷り込むと同時に右足の踝を敵手の耻骨にあてゝ兩肘を兩乳引絞り寄せ稍々徐ろに右足を眞直く天井板を踏張る心持にて敵手を彈ね上る敵手は武士の（右膝に注意し若し右側へ傾き居れは押し潰して武士に右膝を兩肘の眞中心に抱くの必要を知らしめ）彈ね上るに應し多少重みを保ちて兩手を武士の兩腕又は疊につき徐ろに回轉す武士は兩襟を握りたるまゝ互に同一の方へ起りつゝ又右足を辷り込み前の反對にし又同しく起りつゝ兩足を辷り込み兩膝を左右へ披らき兩脛にて敵手の大腿部を掬ひ上る敵手は前の如く回轉す又之を復す最初より四たひ目にして止む

更に立て武士は敵手に接近し機を見て飛付きつゝ兩襟を握り眞捨身を應用す若し兩襟を掴み外るれは箕踞仰倒するの決心なくんばあらず斯の如く繰り返へし繰り返し行ふ

べし

振氣流練體柔術第十七段之形

一　四ッ手表　　二　左右の違ひ

武士より進み敵手の右側へ向きを替へ互に左下手に組み武士は腰を落し左足を敵手の兩足の中へ踏込み稍々押し立てゝ右足を敵手の左側外へ踏込み兩手にて敵手の腰を緒め折り掛る敵手は兩足を動かさすして抗し堪ゆ更に腰を落して低くなりつゝ左足を引き其左足を敵手の右蹼部にあてゝ兩手を利せ箕踞しながら上體を吾か左へ捻り倒れつつ斜め拾身の如くす(斜め拾身と足の掛方に別あるのみ)

三　四ッ手裏　　四　左右の違ひ

武士より眞直く進みたるまゝ一旦左下手に組み武士は右手を脱きて敵手の股へ入れると同時に兩足共辷り込み右掌にて敵手の左脚を押しつゝ吾が頭足を反對に廻はし右足にて敵手の臀部を蹴る敵手は蹴られたる時充分に狐飛ひ猫回へりす

五　則首表　　六　左右の違ひ

敵手は進んて右手にて武士の左頸の方より則首に鎌に掛け引寄せんとす武士は腰を落し力を首に入れ兩手を敵手の右腕の上に交叉し首を縮めて敵手の右腕を吾が右方へ拂除け直に左足を敵手の右足外へ踏込み左肘尖にて敵手の脇腹へ當る擬勢をなして右手にて敵手の右腿を掬ひ遣る敵手仰倒猫回へりし立つ

七　則首裏　　八　左右の違ひ

敵手右拳にて打込み來る武士は左手の諸爪を敵手に向けて矢筈よし左足を踏込みつゝ受止め右手にて其手首を握り敵手を稍々左肩に擔き廻はしつゝ左踵を敵手の右足へ引掛け倒して羽伏せにす

九　河津表　　十　左右の違ひ

武士より進んて左下手に組ひ敵手は腰を入れ右足を武士の兩足間へ踏移し右手の尺澤にて武士の首を捲き右足を入れて武士の左足を捲く武士は腰を落しながら右足を引拔く(河津解ける)兩手を敵手の腹背へ添へ右足を敵手の股へ蹴り込み回へる敵手狐飛猫回す

十一　河津裏

敵手より進み來て左下手に組み表の如くす武士は河津を解き直に左手を敵手の後へ右手を敵手の胸へあてゝ吾が體を進めつゝ押し倒す敵手仰猫回へりし立つ

十二　左右の違ひ

十三　頤搦み表

互に進逕ひ左下手に組み武士は右足を敵手の兩足間へ踏込みつゝ右手にて敵手の左肩を越して後帶を掴み左手にて前帶を取り敵手を吾が右腕骨にて吾が左方へ振り回はし右手を敵手の右頸より捲き込みて頤に搦み一旦押へて體勢を崩し右足を引拔らくと同時に立なから敵手を後方へ（敵手は齒を嚙みしめ居るべし）引倒す敵手仰向

十四　左右の違ひ

十五　頤搦み裏

互に前の反對に取組み敵手より武士の頤に搦み一旦押へんとするを利用し武士は左手にて敵手の脊部を引摺り上げつゝ右手を敵手の左蹊部へあて右足を敵手の股へ蹴り込み回へる敵手右肩猫回へり又は狐飛猫回へりすべし

十六　左右の違ひ

十七　外踝拂ひ倒し表

十八　左右の違ひ

互に右足を踏込み右肩を低くし右肩にて當り合ひ武士は左手にて敵手の後帶を取り右手にて前帶を取る敵手は兩手にて武士の兩腰を押す武士之を利用し右手の手刀にて敵手の右外踝を掻き拂ふと同時に左足を引拔き其左膝をつく敵手仰向

十九　外踝拂ひ倒し裏

二十　左右の違ひ

互に前の反對に組み敵手より掻き拂ふ時武士は更に兩手にて敵手の左手を握り半々猫回へりし右足にて寸口釣鐘の如く蹴り起きて羽伏せにす敵手片四ッ這り

此の段の終に掛り稽古をなすべし掛り稽古は武士の爲めに設けたるものにして先つ武士は吾が兩肘を兩脇へ絞り寄せ兩手を矢筈にし敵手の兩腋下を差し腰を入れて前額を敵手の右鎖骨部へ付け押し立る敵手は先つ右胸を前へ押出し兩肘を兩脇へ絞り寄せなから兩手にて武士の兩二の腕を握り武士より押立て來るを受け抗して武士の前足に注意し其前足の方へ捻り倒し賺し倒す即ち武士右足を前にし押し來らは之を吾が左側へ捻り倒す武士は踏切て稍々宙間に半は回轉し左手にて反動を取り左肩後ろ猫回へりし起きて又直に左足を前にし前額を敵手の右鎖骨部（左鎖骨部は食道及び心臟あるを以

て打付(ブッカル)べからず）へ付け押立る敵手は之を吾が右側へ賺し（少々引披らく）倒す武士は前の如く右手にて反動を取り右肩後ろ猫回へりし起きて復た押立る尤も敵手武士共に特別製の一枚疊の上にて立合ひて充分に踏張り合ひ敵手は武士を其一枚疊の左右へ放(ホイ)投け放(ホイナ)投す武士は起きては正面より其一枚疊の末端へ押出すを目的とす故に敵手は其一枚疊の末端へ押出されたる時は降參りと叫ぶ等一定の規矩を嚴守すべし又は四ッ手に組むも可なりとす

附言　任に本所區に在るを幸ひ屢々相撲稽古場を見る彼等が毎朝粥を啜つて右へ投げられ左へ倒され前額にて右胸へ打(ブツ)當り劒血迸出するも屈せず揉みに揉まれて殆んと人事も省せざる程に至て休み而して又直に力(ブト)めて奮起し片隅に立て兩膝を左右へ一盃に披らき又は腰を落し指頭趾頭に力を入れ若しくは柱に向つてヤーと押すなと寒中に裸體ながらも終始頭髮より煙立て冷霜を知らざるものゝ如し之を鑑みて劍は打込みを專一とし搏は形を主要とし修練すべし若し疑はゝ往て地取りを見よ思ひ半に過ぎなん

振氣流練體柔術第十八段之形

一　後帶表

敵手は武士の右側より武士の後へ廻はり右手にて武士の後帶を掴み引寄せる武士は力足を踏んで腰を据へ稍々徐かに右回はれし左足を敵手の右足の外側へ踏込み右手の尺澤を敵手の右腋下より入れて敵手の首を捲き左手は敵手の前帶へ添へ腰を割り兩手を利せて稍々敵手を釣り上る心持にて右方へ抛け遣る敵手左肩猫回へりす

二　左右の違ひ

敵手武士共に前の如くし武士より抛げんとする時敵手は反(ソ)り抗し堪ゆ而して右手の尺澤よて武士の左頸より首を捲く武士は右手を敵手の腹へ左手を敵手の脊に廻はして右足を敵手の腹へ蹴り込み回へる敵手狐飛び猫回へりす

三　後帶裏

敵手武士共に前の如くし武士より抛げんとする時敵手は反(ソ)り抗し堪ゆ而して右手の尺澤よて武士の左頸より首を捲く武士は右手を敵手の腹へ左手を敵手の脊に廻はして右足を敵手の腹へ蹴り込み回へる敵手狐飛び猫回へりす

四　左右の違ひ

五　膝切り表

敵手右手にて武士の左襟を取り左手にて武士の前帶を下より取り押し立る武士は右手にて敵手の右腕を握り左手にて其手首を握り右膝を屈めて外より敵手の左腕上へ乘せ下へ押し切り直に右手を敵手の右手首へ左手を其二の腕へ握り換へ左足にて敵手の右

六　左右の違ひ

腰を踏張る（敵手は左手を右腰へ添へ）敵手の體勢崩れたる時武士は左足を外づすと同時に引披らきつゝ引付る敵手四ッ這りす

七　膝切り裏

武士敵手前の如くし武士は右膝にて下へ押し切り直に其右足を敵手の右足の趾前へ移し兩手にて敵手の右肩腕を握り敵手を脊負ひ前面へ抛け落す敵手仰向

八　左右の違ひ

九　輪切り表

敵手は手右を上へ左手を下へ交叉し武士の兩襟を握り咽喉を締めんとす武士は右手を敵手の左手の上より入れて己れの兩手先きを結ひ合せ右足を引くと同時に兩手を利せて右方へ輪形のまゝに押し廻はして襟の手を離し直に兩手にて敵手の右腕を握り前の膝切り表の如くす

十　左右の違ひ

十一　輪切り裏

武士敵手前の如くし武士は襟の手を離し直に前の膝切り裏の如くす

十二　左右の違ひ

十三　逆合せ表

十四　左右の違ひ

敵手左手にて武士の右襟を取る武士右手にて敵手の左手首を握る敵手右拳にて武士の頭へ打込む武士右腕にて之を受止めつゝ其手首を握り右足を引くと同時に逆に敵手の兩肘を打合せる樣に打合せる敵手は逆に兩肘を打合せられぬ樣に横に回へり仰向す

十五　逆合せ裏

互に前の反對に取組み武士右拳にて敵手の頭へ打込む敵手右腕にて受止めつゝ其手首を握り逆に兩肘を打合せんとす武士は敵手の兩手を握りたるまゝ左膝を敵手の右足の外側へつき右膝を立てながら披らき左肩へ敵手を脊負ひ上げる心持にて前面へ引付け投げ遣る敵手左肩猫回へり又は狐飛び猫回へりす

十六　左右の違ひ

十七　自己過ち表

敵手は武士の近接し來る時右手にて武士の左襟を握り左手にて前帶を下より取り押立る武士は右手の掌を敵手の則首に鎌掛けにし左手にて敵手の前帶を下より掴み敵手の押し來るを利用し敵手の股へ兩足共に辷り込む敵手は稍々徐ろに回轉し落ちて仰向す

十八　左右の違ひ

十九　自己過ち裏

二十　左右の違ひ

互に前の反對に取組み武士の股へ辷り込みたる時武士は柔らの本領を應用し全身をやわらかにし輕く臀部にて敵手の腹部を押へ更に兩手を交叉し敵手の咽喉を締む敵手は片足を上げ居りて降參りの記號をなすべし

此段の終りには充分に眞捨身及ひく字投けを交互に演練すべし

振氣流練體柔術第十九段之形

此第十九段は第十六段第十七段第十八段迄を早業にす而して捨身專修及び掛り稽古は除き唯た早業のみ演練するものとす

○一二片手胸倉表○三四片手胸倉裏○五六互胸倉表○七八互胸倉裏○九十後ろ抱表○十一十二後抱裏○十三十四抱上げ表○十五十六抱上げ裏○十七十八髪摺り倒し表○十九二十髪摺り裏○二十一二十二前抱付き表○二十三二十四前抱付き裏○二十五二十六兩手振り離し表○二十七二十八兩手振離裏○二十九三十片手突離し表○三十一三十二片手突離裏○三十三三十四四つ手表○三十五三十六四つ手裏○三十七三十八則首表○三十九四十則首裏○四十一四十二掛留め表○四十三四十四掛留裏○四十五四十六頤搦表○四十七四十八頤搦み裏○四十九五十外踝拂ひ倒し表○五十一五十二外踝拂倒裏○五十三五十四後帶表○五十五五十六後帶裏○五十七五十八膝切り表○五十九六十膝切り裏○六十一六十二輪切り表○六十三六十四輪切り裏○六十五六十六逆合せ表○六十七六十八逆合せ裏○六十九七十自己過表○七十一七十二自己過裏

振氣流練體柔術第二十段之形

此第二十段は正面右側背面左側に附き廻はる業なり交互小太刀を用ゆ

一　正面

敵手帶刀武士は右手にて逆に敵手の刀柄を握り左足を敵手の右側へ踏込むと同時に左手を敵手の後腰へ掛け右手は刀柄と共に敵手の右肩の方へ押し上げ兩手を利せて押し倒す敵手仰倒武士は逆手にて突く氣勢をなす

二　右側

武士は敵手の右側より横抱きに抱付く敵手は第二段の右下手羽伏せの如く武士の左腕を擔き稍々引廻はす武士は右手にて刀柄を握り右足を引き右肩にて半猫回へりつゝ刀

を奪ひ突く氣勢をなす敵手は武士に後ろ向きになりて右肩猫回へりす

三　背面

武士は敵手の後より左手にて敵手の鐺りを逆に握り右手にて敵手の右手首を握り右足を敵手の右側へ踏込みつゝ敵手の鐺りにて敵手の右腕を押へ押し立る敵手は右足を軸にし身を替はしつゝ右手を捩離し右手の尺澤にて武士の右肩の方より其頸首を捲き締る武士は更に敵手の刀を奪ひ突く氣勢をなす敵手二三歩跡退り仰倒後ろ猫回へりし立つ

四　左側

武士は敵手の左側より左手にて敵手の左手を握り右手にて逆に鐺りを握り一旦上へ押し立てゝ右膝を疊につき左膝を進めなから立てゝ羽伏せにす敵手左下片四つ這り

五　正面

武士帶刀敵手は兩手にて武士の刀柄を握る武士亦兩手にて敵手の兩手の上へを握り前額を敵手の右胸へあてゝ押し立て敵手の右足の浮きたる時左足にて敵手の右外踝を拂

ひ倒す敵手倒れて仰向す

六　右側

敵手は武士の右側より横抱きに抱付く武士は前の右側の敵手に於ける如く羽伏せにせんとす敵手は左足を軸にし身を替はし右手にて武士の左肩後ろより其頸首を捲く武士は反りて右手の尺澤にて敵手の右肩の方より其頸首を捲き締め左手の尺澤にて敵手の右腿の内側を掬ひ高く上げ兩手を利せて敵手を回轉せしむ敵手は猫回りの心持にて仰向

七　背面

敵手は武士の後より武士の兩肩を拍つ武士は回はれ右の如く振り返つて拔打ちにす敵手二三歩跡退りつゝ仰倒猫回へりし立つ拔打は手元低く刀尖高く腕と刀とは六十度を保つ樣に拔き付るを法とす尤も刀尖は必らす敵眼に注ぐべし

八　左側

敵手は武士の左側より兩手にて柄を握る武士は第十段の初本の如くし柄にて敵手の兩

手を捩ぢ離す更に敵手は武士の稍々正面より武士の右側へ首を入れ武士の腰へ抱付く武士は第十段の八本目の如くす但し左手にて反打にする樣に廻り廻はし劍ぎ抜きにすべし

九　正面

武士は傍らに置し在る太刀を徐ろに差して立向ふ敵手は正面より兩手にて武士の大小の柄を握らんとす武士は素早く兩手にて吾が大小を左腰へ押し廻はすと同時に稍々左腰を捻り引きつゝ左手にて敵手の右手首を握り右足を敵手の右側外へ踏込みつゝ右肩にて多少押し立てつゝ右手の尺澤を敵手の右腋より其腕へ鎌掛けにす敵手は右手にて武士の太刀の柄を握る武士は右足を引き鎌を利せつゝ右膝をつき後方へ彈ね遣る敵手は武士の太刀を引抜きながら左肩猫回へりし去り復た直ちに四つ這りしながら飛込み來て突貫く擬勢にて稍々外方を突く武士は右膝を立ると同時に小太刀にて拔打に敵手の突き來る刀尖を打拂ふ（敵手亦打拂はるゝに應じて遠くへ轉ろげ遣る心持にす）や直に膝摺り寄せて左手にて敵手の右手首を握り小太刀の鍔際にて敵手の右手の尺澤と肩の間を摺り捻る敵手半猫回へりし四ッ這りす武士は小太刀の柄頭を其腕へ引掛けて疊に引付け右膝を頭部の方より乘せ押へて小太刀にて首を打つ擬勢に振り上げる敵手降參り

十　右側

敵手は武士の右側より左手にて逆に武士の太刀の柄を握り右手にて逆に武士の小太刀の柄を握る武士は各拇指にて鍔を押へ腰を割り吾か胸へ大小を抱き上げ兩足を入れ替ると同時に大小の柄にて敵手の兩手を下へ押し離す敵手は押し離されし方へ充分に孤飛す武士は一歩進みつゝ太刀を拔打に拔く但し手元低く拔くは前の八本目の如し以下皆準之

十一　背面

敵手は武士の後より兩手共に逆に大小の鞘を握り其鐺りを肩の方へ押し上げ押し立る武士は兩手を逆に柄に掛けなから柄にて掉取りて鐺りを押し立てらるゝまゝ利用し左足を前方へ移しつゝ鞘を己れの左足に添ふ樣に垂直にし復た右足を踏出して更に左足

を引くと同時に身を替はし拐を下へ押し敵手の兩手の鞘を離す敵手仰倒猫回りす武士抜打にす

十二　左側

敵手は武士の左側より左足を武士の前へ踏込て兩手共順に大小の拐を握り下へ押へる武士は兩手を兩拐へ掛けながら大小の拐頭を敵手の右側より右後肩の方へ押し上げつつ一旦右足を敵手の右側外へ踏込みて更に右足を引抜らくと同時に拐頭を己れの右腰へ引付け敵手の兩手の拐を引離す敵手は充分に狐飛び去る武士は抜打にし血ぶりして刀を室に納む敵手俄かに飛び込み來て其太刀を引抜き去る是れより第十段の八本目の通り行ふ

振氣流練體柔術第二十一段の形（是れより以上は他流の技に似寄るものなきにあらず）

一　誘引（サビキ）込み

二　左右の違ひ

武士進んて互に右手にて左襟を取り左手にて右袖を掴み武士は跡へ摺り退りつゝ一（黙唱）と左足を引き二（黙唱）と右足を左足へ引寄せ一（以下默唱）二一二一と大きく左足を引抜

らきつゝ其左膝をつくと同時に際疾く兩手を利せて敵手を引倒す敵手は倒れながら左手にて反動を取る樣に仰向但し左右の終る毎に元の位地に復する尊總べて初段の通りたるべし

三　大手投け

敵手右拳にて打掛る武士は左腕にて之を受け直に兩手にて敵手の右肩腕を握り右踵を敵手の右足の趾前へ踏移し敵手を脊負ひ腰を利せて前面へ投ける敵手仰向

四　左右の違ひ

五　搦手落し

敵手右拳にて打掛る武士は直に左手の尺澤にて敵手の前帶を捲き締ると同時に左足は敵手の右側後方へ深く踏込み右手の尺澤にて敵手の右腿骨部を掬ひ己れの左膕骨上へ敵手を抱き上げて稍々右足を軸にして後方へ振り廻はし放棄つ敵手仰向

六　左右の違ひ

七　大く字投け

敵手右拳にて打掛る武士は直に左手の尺澤にて敵手の後帶を捲き右手にて敵手の右肩腕を握ると同時に左踵を敵手の左足の趾前へ踏込み膝を小く字に屈め腰を左方へ大く

八　左右の違ひ

字に屈め横出せしめ己れの腰を敵手の腰より低く下げ其臆骨にて掬ひ上げ前面へ抛け落す敵手仰向但し臆骨よて掬ひ上ける所主眼たり然らされは敵手反りて押し潰すべし

九　小く字投け

武士進んて右手にて左襟を取りて直に其左腋下へ入れ左手にて右袖を攫み敵手亦初本誘引込みの如くし武士より一二一二一（唱）と引摺り退りつゝ左手を利せると同時に腰を敵手の右方へチョッと横出せしめ敵手を吾が臆骨上へ引乗せ前面へ投け落す敵手仰向但し大腿部にて掃ふべからず當流第十一段の應し返しを利用せらるれとなり

十　左右の違ひ

十一　拒く字投け

互に前の如く襟袖を取り武士は敵手を引摺り出さんとす敵手虞を据へて動かす武士は更に敵手を引屈めさせて襟の手を緩め其腰を沿ふて尺澤にて敵手の首を捲き右腿を敵手の右足の趾前へ踏込み腰を敵手の股へ入れて腰にて掬ひ上ると同時に右手を利せて前面へ投げ落す敵手仰向

十二　左右の違ひ

十三　蟹行足拂ひ

十四　左右の違ひ

武士進んて互に前の如く襟袖を取り向きを替へ蟹の横行に擬し武士は右手の肘を曲けて敵手の左襟を高く差上ると同時に一（唱）と右足を横に移し二（唱）と左足を右足へ引寄せ右手を卸ろす即ち是れ波狀形なり二三度波狀形を行ひ二即ち左足の踝にて敵手の右足より後れて其外踝を拂ひ倒す敵手仰向

十五　綱引足拂ひ

十六　左右の違ひ

互に初本の誘引込みの如くし武士は右足をチョッと右外へ移すと同時に兩手を左足の踝にて敵手の踏出し來る右足の外踝を内へ拂ひ倒す敵手仰向

十七　鞍下掬ひ

十八　左右の違ひ

互に前の如く襟袖を取り武士は右肘を曲げて敵手の左襟を高く差上げ稍々左足を軸にし敵手を己のれ右後ろへ引廻はしつゝ敵手の跨がりたる時右膝を屈めながら右臆骨を其股下へ入れ吾が右臆骨に一旦掬ひ上げ敵手の兩足の全く疊を離れたる途端に兩手を利せ吾が稍々右側前面捻り投げ落す敵手仰向

十九　眞捨身

二十　左右の違ひ

武士進んで兩手にて敵手の兩襟を取り多少押し立る敵手より押し戻す途端に武士は當流第十三段の初本の如くすべし或流は耻骨を彈ねると鼻頭を擦り剝ぐとて蹊部を彈るとか云へり當流は未だ曾て擦傷せしことなし將來とても故意に渉らざる限りは過失なきを保險す即ち是等の場合に於て此所にては此の通り彼の所にては彼の通りと區別すること賢こけれ當流は必らず耻骨を彈ね遣るへし之れに違へゞ本館に於て習修するを許さず

二十一　辷り違ひ

武士前の如くし右手を敵手の左腋下へ矢筈にあてる樣にし兩足を揃へて敵手の股へ辷り込んどすゝに敵手は稍々自ら充分に狐飛び去るべし

二十二　左右の違ひ

二十三　見雲

敵手右拳にて打掛る武士は直に右肩を敵手の右腰へ接し兩手にて敵手の兩腰を差上げ先つ敵手を吾が後方へ投げ落しつゝ己も亦共倒れす是れ大石を投るに卒倒すると同一の理にて見雲は琉球の方言に出つ然ども平生は餘り激烈に渉らざる樣に注意し兩人の四足は同一點に揃へ互ひの頭は左右へ三尺許り披らき扇形をなして仰倒すへし

二十四　左右の違ひ

二十五　蟹の共倒れ

武士進んで互に右手にて左襟を取り左手にて左肩腕を握る武士は更に右手を敵手の左腋下へ入れつゝ向きを替へ敵手を己れの左方へ誘ひつゝ左足にて敵手の右足の外踝を拂ひ込むと同時に左手を利せ左方へ敵手を振り飛ゞす心持にて共倒れし扇形に仰倒す

二十六　左右の違ひ

二十七　蟹の門倒れ

武士進んで互に右下手に組みつゝ向きを替へ腰を割つて自衛沈體となり武士は更に左手にて敵手の右の二の腕を捲き込み門ぬきにする樣にし己れの左方へ誘ひ往く敵手は右の手を曲けて門ぬきを外ッす樣に注意し而して前の蟹の共倒れの如くす

二十八　左右の違ひ

二十九　浮瀨捻り倒れ

互に右下手に組み武士は更に右手を敵手の左腋下へ入れ右足を引きつゝ敵手の左足を踏移さしめ浮きたる時左手を利せながら己れの脊を敵手の左足側へ打付る樣に捻り倒る敵手右肩猫回へりし武士亦稍々小形に左肩後ろ猫回へりし互に片膝立てゝ相對す

三十　左右の違ひ

振氣流練體柔術第二十二段之形

一　行逢ひ

敵手右拳にて打掛る武士は左足を引き吾が左手を捻りて拇指を外へ向け四指の甲を下々にし敵手の打込む右手首を握りて己れの左腰へ引付け右の手刀を敵手の右肩の凹部へあて右踵を敵手の右足に引掛け手刀を押し倒し繼て右膝を疊につき左手にて敵手の右の二の腕を右膝の上へ乘せ折り掛け右手の拇指にて敵手の右耳の根を押す敵手降參り

二　左右の違ひ

三　拳突

敵手右拳にて武士の左肋部へ突掛る武士は左の肘を曲げ左肋へ之を接して其突きを防き直に左手にて敵手の右手首を握り右足を敵手の右足の後方へ踏込むと同時に右手を敵手の右腋下より入れて四指の甲を外へ向け敵手の後襟を握り引倒して立ながら左腕を枕らさせると同時に右手は敵手の右の二の腕を握り換へ左手にて敵手の咽喉をかたひ

四　左右の違ひ

五　髻掴

敵手右手にて武士の頭髪を掴む武士は腰を割り右手の拇指を敵手の右手の拇食兩指の股の根に押へ込み左手を敵手の右の二の腕へ添へ右手は拇指を利せ敵手の髻拇みの手を離し左足を敵手の右足へ引掛け兩手を利せ敵手を倒して立ながら羽伏せにす

六　左右の違ひ

七　撞木

敵手右拳にて打掛る武士は左足を踏込み膝を屈めて低くなると同時に左手の拇指を內に向け矢筈にして敵手の右の二の腕へ下より丁字形にし受けて右手の拇指も內に向け敵手の右手首を捲き掛けて握り敵手の右肘を下へ向け己れの頭を其肘下へ入れ頭の片側にて敵手の右肘を折り（丁字形に）掛ける敵手は伸ひ上りながら降參りと云ふ武士は更に左手にて敵手の左前襟を掴み一旦敵手を引寄せて又向ふへ突き放つ敵手仰倒猫回へりし立つ

八　左右の違ひ

九　苅捨

敵手右拳にて打掛る武士は右腕にて受止め其手首を握り左足を敵手の右足後へ踏込み

十　左右の違ひ

左手を敵手の左肩へ引掛け左腰と左手を利せ左足を引拔らき己れの後方へ引倒す敵手仰向

十一　柏子

武士より右拳にて打掛る敵手は之を賺し右手にて武士の左襟を取り押し來る武士は兩手を敵手の右手首へ逆に掛け敵手の押來るを利用し敵手の右手首を巳れの腮へ持上げ左肘尖にて敵手の右腕を逆に折り掛ると同時に右足を引き左足は浮へチョンチョンと釣り合を取り引摺り往く敵手は欹傾しながら降參りと云ふ武士は更に兩手を敵手の右手首へ揃へ板割りにし左足を引拔らき左膝をつきかたむ敵手四ッ這りす

十二　左右の違ひ

十三　割り込み

敵手兩手にて武士の兩襟を握る武士は兩腕を敵手の兩手首の上に交叉して腰を割り下へ押へ付け而して兩手を敵手の兩腕の中へ割り入れ手先きを敵手の兩脇へ掛け兩足共敵手の股へ辷り込みつゝ兩手を利せ遣る敵手狐飛ひ猫回へりす

十四　左右の違ひ

十五　連れ柏子

十六　左右の違ひ

敵手武士共前の如くし押へ付け而して武士は右手を敵手の兩腕の下方より入れて敵手の腮を張りつゝ右足を敵手の右足外へ踏移し身を替はし左手を敵手の前帶へ沿ひ廻はして敵手の左腰を捲き右手を其右腰へ添へると同時に左足を敵手の右足後へ踏移し敵手を抱き上げ稍々右足を軸にし後方へ振り廻はし落す敵手仰向

十七　則首返し

十八　左右の違ひ

敵手は武士の進來るを後ち兩腕にて武士の右股へ抱付く武士は箕踞しつゝ右手にて敵手の則首を押へ左手を敵手の脊中へ伸はして其後帶を握り右足は敵手の股へ伸はし込み己れの頭の方へ敵手を回へし遣る敵手は回轉の心持にて回るべし

十九　手操

二十　左右の違ひ

敵手右拳にて打掛る武士は右腕にて受止めつゝ左手にて敵手の右足を掬ひ上る敵手は掬上げられなからチョンチョンと進み込む（右足を武士の股へ差込）武士は飛違へに左足を敵手の右側へ踏込み右足を引拔らき其右膝を屈めながら其膝頭にて敵手の右大腿の下面を彈ね上げる敵手仰倒猫回へりし立つ

振氣流練體柔術第二十三段

一　脊負投け

敵手右拳にて打掛る武士左腕よて受止め直に右手を敵手の右腋下より入れて右肩腕を掴むと同時に右踵を敵手の右足の趾前へ踏移し左手も敵手の右肩腕へ添へ投る敵手仰向

二　左右の違ひ

三　入れ首反り

敵手右拳にて打掛る武士左腕にて受止め直に其左手にて敵手の右手首を握り更に武士より右拳にて打掛る敵手左腕にて受止め直に其左手にて武士の右手首を握り互に首を各右腋下へ入れる武士は兩足を揃へ後へ反る敵手は欹傾しながら右肩にて回轉仰向す

四　左右の違ひ

五　飛ひ込み

敵手右拳にて打掛る武士左腕にて受止め直に其左手にて敵手の右の二の腕を上へより捲き込み其袖下を掴み右手の四指の甲を外へ向け敵手の後襟を掴み一旦敵手を引寄せる敵手の體勢を崩し又押立る敵手踏止りたる時武士は右足を敵手の足後へ飛込み横へ

六　左右の違ひ

伸はすと同時に左膝をつきつゝ兩手を利せ押し廻はす敵手は右足を擧げ左足にてチョッと跡退りし左手にて反動を取る樣に仰倒す

七　羽返し

敵手右拳にて打掛る武士は其右拳に關せず直に前額を敵手の右胸へ附け兩手にて敵手の腰を折り掛る敵手腰を落し割り開く互に前懸りに自衛沈體となる武士は右手を脱き其尺澤にて敵手の首（右肩の方より）を捲き稍々左足を軸にし右の後方へ引廻はしつゝ右踵にて敵手の右足の内踝を拂ひ倒す敵手右手にし反動を取り仰向

八　左右の違ひ

九　釣り落し

敵手右拳にて打掛る武士左腕にて受止め直に其左手にて其右手首を握りて吾が左腰へ引付けると同時に左足を引拔らきて右手を敵手の右の二の腕の上を越して敵手の左足の腸へ引掛け釣り上げ落す敵手は右手を振離して右手にて反動仰向す

十　左右の違ひ

十一　片禪け

敵手右拳にて打掛る武士左腕にて受止め直に其左手にて敵手の右の二の腕を握り首を

十二　左右の違ひ

其右腕下へ差込み右足を敵手の右足外へ踏込むと同時に右手を内へ捻り拇指を上にし敵手の右内股へ掛け片襷けに敵手を脊負ふ敵手降參り

十三　矢筈

敵手右拳にて打掛る武士は其右拳に關せず直に右膝を屈めながら敵手の股へ進込むと同時に左手も敵手の股へ差込み右手は敵手の後帶を掴み左手を利せ掬ひ上る敵手降參り又爲し得れば武士の左肩を越へて回轉し落つ

十四　左右の違ひ

十五　逆手

敵手右拳にて打掛る武士は右腕にて受止め直に兩手にて敵手の右肩腕を握り稍々左足を軸にし右踵を敵手の右足の外側へ踏込む樣に身を替はしつゝ敵手の右の尺澤を上へ向ける樣にし吾が左肩にて擔く敵手降參り又爲し得れば敵手は左手を矢筈にしながら下へ向け武士の左腰を押して逆立ちし前へ落ちて立つ武士は兩手を深へ掬ひ違るものとす

十六　左右の違ひ

十七　友車

十八　左右の違ひ

敵手右拳にて打掛る武士左腕にて受止め直に其手の四指と四指とを握り合ふ又敵手左拳よて武士の右胴へ打掛る武士は右肘を曲け右拳を立てゝ受止め直に其手の四指と四指とを握り合ふ武士は右手を敵手は左手を共に高く上げ其手の下を潜り脊と脊とを合せて武士は腰にて敵手を掬ひ前へ回轉せしむ

十九　皆印捨身

二十　左右の違ひ

敵手右拳にて打掛る武士左腕にて受止め直に兩手を入れて敵手の首を挾み四指を組合せ右足を敵手の耻骨にあてゝ左足を辷らし右足を彈ねつゝ兩手を利せ徐ろに敵手を回轉せしむ敵手亦回轉仰向す武士は仰向しなから兩拇指にて頸筋動脈を締む敵手降參り

振氣流練體柔術第二十四段之形

此第二十四段は第二十一段乃至第二十三段を早業にす但し波狀形に一二一二と引き往く所は一二直ちに施術すへし

○一二誘引込○三四大手投○五六搦手落○七八大く字○九十小く字○十一十二拒く字○十三十四横盤拂○十五十六綱引拂○十七十八鞍下掬腰○十九二十眞捨身○二十一二十二

摺り出し○二十三二十四見雲○二十五二十六蟹の共倒れ○二十七二十八蟹の門倒れ○二十九三十浮瀬捻り倒れ○三十一三十二行逢ひ○三十三三十四拳突○三十五三十六髻摺○三十七三十八撞木○三十九四十苅捨○四十一四十二柏子○四十三四十四割込○四十五四十六連柏子○四十七四十八則首返し○四十九五十手操○五十一五十二脊負投○五十三五十四入れ首反り○五十五五十六飛込○五十七五十八羽返し○五十九六十釣落○六十一六十二片襷○六十三六十四矢倉○六十五六十六逆手○六十七六十八友車○六十九七十皆印

振氣流練體柔術第二十五段之形

此第二十五段以上は居取りと稱し踞はり居る所の技なり踞法は必らず九觀儀則の通り體勢を整ひ兩趾の拇爪を突き合せ兩膝を左右へ披らき力らを腹下へ入れ磐石の如く押すも引くも體勢の崩潰せざるを要す

一　正面

敵手は武士と對座して目禮をなし大小を帶ひ互に氣當りし敵手より矢と掛聲をなす武士は右手にて逆に敵手の太刀の柄を握り左手にて逆に敵手の右手首を握り右膝を立てながら右手にて逆に短刀の柄を握り左手は逆に太刀の鐺りを握り短刀の鐺りを太刀の鍔に掛ける樣にし柄と鞘とにてかたむ敵手は九觀儀則のまゝにて降參り

二　右側

武士は敵手の右側に並ひて座す武士右膝を立てながら右手にて逆に短刀の柄を握り左手は逆に太刀の鐺りを握り短刀の鐺りを太刀の鍔に掛ける樣にし柄と鞘とにてかたむ敵手は九觀儀則のまゝにて降參り

三　後方

武士は敵手の後方へ座し右手にて敵手の右手首を握り左手は前の二本目の如く太刀の鞘を握り右足を敵手の左臀部へあてゝ押し立てつゝ兩手を利せ己れの右方へ倒す敵手は右肩を下たに一片四ッ這りし降參り

四　左側

武士は敵手の左側へ座し左手にて敵手の左手首を握り右手にて太刀の鞘を押し立てつゝ右膝を立てゝ敵手の左の二の腕を鞘にて押へ羽伏せにかたむ敵手左肩を下たにし降

ながら敵手の右側へ踏込み兩手を利せ押し廻はす敵手は押し廻はされて仰向す武士は其鍔にて敵手の胸を押へかたむ敵手降參り

参り敵手は大小を武士へ渡す武士は之を受けて帯ム

五　正面

敵手は武士の大小の両拵を握る武士は両手に各鍔際を握り拵頭を一ゑ寄せ右膝を立て
て拵頭を一旦左方へ引廻はし敵手の両手を掬ひ右膝共に右方へ引き拂ひ離す敵手は引
離なされたる拍子に連れて右肩猫回へりし去る武士は立上りつゝ拔打にす（武士は血ぶり
して後ろに腰
へ差すべし）

六　右側

敵手は武士の右側に座し左手にて武士の太刀の拵を握らんとす武士は右肘尖にて敵手
の心部へ當る擬勢をなす敵手飛ひ退く武士右膝立てゝ拔打にす敵手後ろ猫回へりし立
つ

七　後方

敵手は武士の後方より來り立ちなから武士の両肩へ両手を掛る武士右方へ振り向きつ
つ右膝を立てゝ拔打にす敵手飛ひ退き後ろ猫回へりし立つ

八　左側

敵手は武士の左側へ座し両手を逆に上下より両拵を握る武士は左膝を引拔らき拵頭を
左膝の方へ寄せ掬ひ返へして敵手の両手を引離す敵手は其拍子に連れて右肩猫回へり
し去る武士立上りつゝ拔打にす續て第十段の八本目前抱き先王遺法拔打を復習すべし

振氣流練體柔術第二十六段之形

此第二十六段以上は殊に腹力を要するが故に敵手たる者は口獅の如く腹から腹からと
云ひ柔らに柔らにと云ふ注意を與へつゝ充分に抗し合ひ練體研窮し來れり

一　楊柳羽伏せ

敵手武士各九觀儀則の体勢を整ひ両膝を左右へ拔らき稍々膝頭相接して座す敵手先つ
徐ろに左手にて武士の右手首を逆に握り右手にて武士の右掌の四指を握り外へ折り掛
る武士は五指共に柔らかに伸ばして右肩を落し稍々右方へ上体を傾け右肘を左方へ寄
せ右手は折らるゝまゝ右外へ流し出す是れ所謂楊柳の心ろなり武士は更に位地を替へ
両手にて敵手の右手首と右の二の腕とを握り左手を差し押へ付けんとす敵手は稍々四

二　左右の違ひ

つ這りて左手を疊へつき抗し耐ゆ武士は兩膝を疊へつきたるまゝ左手を差しつゝ多少兩膝を進めて敵手を軸にし押し廻はりながら押へ付け羽伏せにす（左腕の骨にて敵手の右の二の腕を押へ引付る技なれども腹力を強大ならしむるが爲めに斯の如く抗し合ふものと知るべし）

三　楊柳肘畠り

敵手前の如くし折り掛る武士亦前の如くし稍々折られながら其右手を敵手の左肩の方へ差し伸ばして右拳を握り固め己れの胸へ敵手の右拳共に引付ると同時に右膝を立て稍々上体を後方へ引き右肘尖にて敵手の胸へ當る敵手チョッと飛退く武士は右膝を立て左手にて敵手の右膝を内へ拂込むと同時に右手にて敵手の左腋下を抱き倒して敵手を引寄せ左膝へ枕らさせ左手にて咽喉を締む敵手片足を上げ居りて降參り

四　左右の違ひ

五　楊柳爪返し

敵手兩手にて武士の兩手の四指を握り折り掛る武士は右肩を落して初段の爪返しの如く右肩にて擔き上げ離し更に右膝を立てつゝ兩拳を揃へ敵手の兩眼にあつる擬勢をな

す敵手チョッと飛退きつゝ仰倒後ろ猫回へりし立つ

六　左右の違ひ

七　片手胸倉

敵手右手にて武士の左襟を掴む武士は右手にて敵手の握りたる襟の下を握る敵手は武士の胸を押し倒さんとす武士は之れに抗し合ひつゝ右側へ向きを替へる心持にて左膝を立ると同時に左手刀にて敵手の右手の小指の方より兩膝共に押し廻はしつゝ押し離し直に右手にて其手首を握り左手にて敵手の右の二の腕を差し初本楊柳羽伏せの如くす敵手は充分に之れに抗して押し付けられんとする時右肩猫回へり仰向す武士は三本目の楊柳肘當りの如くし咽喉を締む

八　左右の違ひ

九　飛ひ脱け羽伏せ

敵手兩手にて武士の兩手首を握る武士は握られたる兩手の拳を疊へつき敵手の押し來る時兩足は其儘に置き後方へ飛退き右肘を下げて下面より敵手の左手首を握り左手にて其拳を覆ひ握り右膝を立て左足を引拔らき羽伏せにす

十　左右の違ひ

十一　捲き返し

十二　左右の違ひ

敵手左手にて武士の右手首を握り右手にて武士の右尺澤を握り押し倒さんとす武士は右肩を張り出して右拳をつき抗し耐へ右拳を左乳部へ掬ひ上げ右膝を立てながら右足を敵手の右腰の後方へ踏込み立て左足も右足へ引寄せ更に右足を引き伸はすと同時に右腕を振り伸はす敵手四ッ這りす○此の終に敵手は蜻蛉回へりし位地を片隅へ轉し左膝をつき右膝を後方へ引披らき立つ武士亦進み往て左膝を敵手の左足に接する位ひに右膝を引披らき九觀儀則の通りに座して次の披に移るものとす

十三　腋當り

敵手は右手にて武士の左手首を握り左肘尖は武士の左脇へ當る樣にし寄り掛る武士は右掌を已れの左脇へ添へて當身を防く樣にす敵手より一應押して引付ける時武士は摺寄て右脛にて彈ねる用意をなし敵手より再應押し來るを利用し仰倒しながら右脛にて彈ね回へすと同時に左手にて敵手の右腰の邊を掴み敵手の回轉するに附隨ひて右肩後ろ猫回へり起き右手にて咽喉を締む敵手片足を上げ居りて降參り

十四　左右の違ひ

十五　咽喉交叉締め

十六　左右の違ひ

敵手兩手を交叉し武士の兩襟を取り咽喉を締む武士は右肩を敵手の交叉せる兩手の間に下たより割り込む樣に低くし其手先きにて敵手の左肩より後襟を握り右肩を利せて敵手の兩手を離し左手にて敵手の右腋下を掬ひ上げながら辷り込む心持ちにて敵手を吾が腹へ引乘せつゝ兩膝は左右へ披らき屈めながら兩足の甲にて敵手の兩股を掬ひ上げ兩手も利せ已れより回へり掛けて敵手を回轉せしめ起きて敵手の胸へ輕く跨がり兩手を交叉し咽喉を締む若し敵手の腹へ跨がりたる時は敵手は兩足を上げ疊を拍て腹を張り武士を彈ね落すべし而して組打となるべし組打を減少すと云ふも茲に達せざる迄の間に妄用するを戒めたるものなれバ應分に組打を行ふを得べし

振氣流練體柔術第二十七段之形

一　振り込み

一　左右の違ひ

敵手武士共に九觀儀則の通りに座す敵手兩手にて武士の右手首を握る武士は右拳を固めて突き倒されさる樣に右膝へ右拳を接して抗し耐へ而して其右拳をチョット膝頭より外して其肘を曲げ右拳を吾が左胸へ曲げ込み復た右拳を振り戻すと同時に右膝を立

て右腕にて敵手を抱込み左掌にて敵手の右膝を内へ拂込み左膝枕ら左手咽喉締め

三　突き避け

敵手右拳にて武士の心窩へ突掛る武士は左手にて敵手の右拳を拂ひ除けつゝ上體を捻り避け左手は敵手の右手首を握り右手は敵手の右尺澤を押すと同時に右膝を立てながら敵手の右側へ踏込み敵手を倒し武士は立て左足も右足へ引寄せ敵手を引き起つゝ右足を引き其右膝をつき右へ半々猫回へりし起る途端に右足にて蹴る敵手片四つ這りす

四　左右の違ひ

五　捻り返へし

敵手右拳にて前の如く突き掛る武士は左手の四指の甲を上にし前の如く避けて直に左手にて逆に敵手の右手首を握り右膝を立てながら敵手の右側へ踏込みつゝ左手を利せて捻りつゝ右の膝頭へ敵手の右手を引付け右掌にて敵手の右拳の甲を摺り廻はす心持ちにて捻り掛る敵手は半々猫回へりし左拳を振り離して去る

六　左右の違ひ

七　突き込み

敵手兩手を逆にし武士の右手首を握る武士は握られたるまゝ右拳にて敵手の下腹を押

八　左右の違ひ

し倒す敵手は倒れて尙ほ兩手を放さゝるに依り武士は右肘を下げて引起し更に兩手にて敵手の右手首を握り右足を引き伸ばし右へ半々猫回へりし三本目の突避けの如くす

九　鬼拳

敵手前の如く握る武士は右拳を敵手の右手首の下面を通して己れの左脇へ引付け右肘を下げて右拳を高く突き上ると同時に右膝を立てゝ右拳を轉回し敵手の兩腕の中に差込みつゝ右拳を曲げて己れの左脇の方へ突き離し更に右肘尖にて敵手の胸に當身する擬勢をなす敵手は第二十六段の三本目の楊柳肘當りの如くす○互に三四尺隔てゝ對座す

十　左右の違ひ

十一　飛込み

武士は兩手にて疊を拍打し其反動を利用して敵手の右側後方へ飛込むと同時に左尺澤にて敵手の咽喉を捲き締め右膝を立てゝ右手にて敵手の右手首を握り右膝部に折りかたむ

十二　左右の違ひ

十三　脊帶離し

十四　左右の違ひ

敵手は武士の後方へ右膝を立てながら座し武士の後帶へ上へより右手の四指を入れて握る武士立上りて右手の手刀を敵手の右小指へ爪下りに摺り離すと同時に回はれ右に飛ひ違へ兩手にて敵手の右の腕と手首を握り左足を引く敵手左手を右腋下へ添ゆ武士は敵手の左手の甲を蹴るへし○注意　敵手は腹に力を入れ居ること武士は手の甲を蹴ること是れ也

十五　脊折り返し　十六　左右の違ひ

武士は敵手の後方へ廻はり立ちなから柔らかに左膝を敵手の脊體骨に押し付ると同時に兩手を敵手の兩肩へ引掛け攻る敵手反る武士は左手を敵手の左肩胛部へ拍ち當る樣にし右足を引披らくと同時に敵手を右方へ投け廻へす敵手可成は抗し最後に四ッ這りす

振氣流練體柔術第二十八段之形

一　大腿かため脫き　二　左右の違ひ

敵手武士共に九觀儀則の通り座し敵手立て多少跡退り更に進て左手にて逆に武士の左襟を握り右手にて武士の右手首を握り左足を武士の前へ踏込みて軸にし回れ右の如く右足を武士の右側後方へ移し武士の右の二の腕を已れの左大腿へ折り掛る武士は之を利用し左掌にて敵手の左踵を掬ひ上げつゝ右肘にて敵手の左大腿を押ゆ敵手は左足を脫き一二歩跡退りて仰倒後ろ猫回へりし立つ武士亦稍々小形に右肩後ろ猫回へりし左足を蹴伸す

三　坊主かため脫き　四　左右の違ひ

敵手は武士の後方へ右膝を立てゝ左膝をつき兩手を武士の兩腋下より入れて武士の後頸へ其兩手先きを組み武士の首を折り掛る武士は兩肘を締め寄せつゝ右肩猫回りの心持ちにて脊部を眼橋の如くし敵手共に右肩にて回へり武士は敵手の腹部へ横に重サなり一層兩肘を締め寄せ稍々兩足を踏ン張り首を反りて之を脫く

五　板割りかため脫き　六　左右の違ひ

敵手は武士の右側へ左膝をつき右膝を立てゝ兩手を逆にし武士の右手首を握り兩拇指にて其右拳の甲を押へ右足にて武士の右膝を踏張ると同時に左膝を引披らき兩手を利

せんとす武士は左拳を敵手の兩腕の中に差入れ右肩半バ猫回へりし捩ち離して起る

七　閂かため脱き　　八　左右の違ひ

敵手は武士の右側より左手は武士の左肩を經て右襟を握り右手は武士の右手を握り武士共に左肩にて回へり仰向したるとき敵手は起きて右足を武士の胸へ左足亦頭の方より胸へ乘せて武士の右手を挾み己れも仰臥すると同時に武士の右手を引付け腹を利せんとす武士は左手にて敵手の右足を拂ひ除けつゝ左足を敵手の腿に掛け踏張り起きて右手は敵手の右腦へ掛けたるまゝ引付け左手にて咽喉を締む○注意　足と腕とは足の力強と雖可成は引付けるに慣れるを要すと云ひ傳へり

九　肩かため脱き　　十　左右の違ひ

敵手武士共に前の如くし敵手は右足にて武士の右膝を踏張り仰向せしめ直にナヨッと四ッ這りて右肩を武士の右肩の下へ入れて兩手を胸と後頸とより通して武士の左肩にて其手先きを組み合せ締め付る武士は兩足を拍て反動を取りつゝ右肘尖を利せつゝ右肩を下たにしつゝ左足にて敵手の右腰を踏張り尙ほ左手の拇指にて敵手の耳の付け根

を押し之れを離して起る

十一　胴締め脱き　　十二　左右の違ひ

敵手武士共に前の如く座し敵手は武士の右手を兩手にて握り引寄せつゝ兩腦にて武士の胴を挾み兩足の甲を交叉しながら仰臥す武士は右手の拳を固めて捩り離し上體を捻りて見苦しからざる樣に後ろ向きになり兩肘尖にて敵手の兩鎧蹊（セイノヲ）に捩り込み之を脱く

十三　穹窿脱き　　十四　左右の違ひ

敵手武士共に前の如くし敵手は右膝を武士の前へ踏込み兩手にて抱き仰倒せしめて武士の腹上へ横に乘り兩肘を武士の左側へ接して疊につき兩膝は武士の右側へ寄せ締め付る武士は兩手にて敵手の左脇を押すと同時に兩足を拍て反動を取り腹力を彈ねつゝ稍々兩足を踏張り穹窿を脱く續て次の技に移るものとす

十五　袈裟かため　　十六　左右の違ひ

武士は敵手の仰臥せる左脇より左手を敵手の右肩を經て首を捲き締め右手にて敵手の左手首を握り左大腿の内側の上へ敵手の左手の肘を乘せる樣に左大腿を寄せ其左足の

外踝の下へ敵手の左拳を押へ込み徐ろに左大腿を上げ左外踝を押へかたむ此の間に敵手は右踵を武士の右足へ引掛け腹にて彈ね返へし又は右掌にて脊中を押し遣りつゝ腹に引乘せ返へす等應分に試むへし術歌に搏ちて組み上へを下へと彈ねつゝも追ひ懸け廻はす葉津美よく知れと云ひ和らけつ强みつ押しつ彈ね懸けつ賺しつ搏ちつ鹽合ひそ知れと云ふ須らく工夫すへし○袈裟かためは當流の黒帶位(丹青冢)田中士が揮筆の松村陣内兩雄組打の額を見て知るへし是亦當時雋秀の名譽を表彰する爲めに本館に永存すと云ふ

振氣流練體柔術第二十九段之形

此第二十九段は早業なるを以て九觀儀則の通り正座するに及はす

○一二楊柳羽伏せ○三四楊柳肘當り○五六楊柳爪返し○七八片手胸倉○九十飛脱け○十一十二捲返し○十三十四腋當り○十五十六咽喉交叉締め○十七十八振込め○十九二十突避○二十一二十二捻返し○二十三二十四突込み○二十五二十六鬼拳○二十七二十八飛込み○二十九三十脊帶離し○三十一三十二脊折返し○三十三三十四大腿かため脱き○三十

五三十六坊主かため脱き〇三十七三十八板割かため脱き〇三十九四十閂かため脱き〇四十一四十二肩かため脱き〇四十三四十四胴締め脱き〇四十五四十六弯窿脱き〇四十七四十八袈裟かため終り

振氣流練體柔術第三十段之形

此第三十段は特に免許の形にして甲乙二種あり其甲種は極意なれは敢て輙く公刋すへからさるを以て別傳とし乃ち茲に乙種の形を示す是れ吾人の氣を練るに足りて其始終には圓相を畫き以て禪諦の妙悞を喩す其體勢たるや實に雍如として泰陽たり而して始めに緩徐たること太古の如く終りに急疾たること迅雷の如し之を演練したる爽快は千萬人と雖吾れ往て敵するの雄心を發揮す然り而して茲に達するは少なくも有形的一千日一萬度無形的（終始念頭に懸け常住座臥此の心を以て心とするを云へり）之れに倍するの修行を積むにあらされは佳境に入る能はさるものとす是を以て黒帶位初級の時より豫習すべし

因に懷石の訣を告けん懷石（會席亦此訛に出つと云）とは讀て字の如く石を懷ろにするの謂にして其意味は奈何に剛膽鐵腸の人と雖神經の作用として不意の事には一時喫驚せさるを得す

然り其瞬間に動揺する心を押し鎮むるに石の重みを懷ろに入れたる心持ちにするを云ふ但し初陣の人が氣は張りなからも銃丸の飛過きたる跡の風吟に驚き頻りに低頭し班末の人が食卓に對して頻りに唾呑みする如きは見苦敷きものならすや此等の場合に於ても武道に達したる者は九觀儀則の體勢を整ひ程善く力を腹に入れ居るが故に泰陽として平生に異なることなし抑々事に臨みて精神を沉着すへしと謂ふも平生より心懸けて鍛錬するにあらされは俄に求めて得へきものにあらす若し平生に其心懸けなくんハ事に臨みて俄に精神を沈着せんと欲して間脫けし精神を沈着するに意なき者は逆上し氣狂ふて腰脫けし到底正當の事を爲す能はさるなり故に克く此の形を修練すへし

一　八相

互に木刀を提け九尺以上を隔てゝ立向ひ徐ろに兩踵を揃へ足尖は矩形より少しく挾く開き兩膝を披らきつゝ蹲踞し徐ろに木刀を拔出し及を左方へ向け木刀尖より疊に卸ろして兩手は各膝へ置き九觀儀則の體勢を整ひ徐ろに立上り左足を引き右足も引き又左足を踏出し右足も踏出し又兩膝を披らき前に蹲踞せし如くす是れ進退作法を示す所以

なり進退作法は必らすしも示し行ふに及はさるなり

互に右手にて木刀を取上けて左手も拇頭へ添へ徐ろに立上りつゝ左足を踏出し右足も踏出し兩踵を揃て互に木刀尖を眼に注き兩擘を伸ばし兩肩の凝らさる樣にし稍々丈伸ひしつゝ左足を引くと同時に徐ろに木刀尖を左方へ傾斜しつゝ兩手の諸爪を前方へ向け左の人指を右の人指へ交叉し大く兩肘を張り頭上へ冠りつゝ右足も引き稍々氣當りしつゝ丈伸ひしつゝ兩拳を左右へ披らき膂骨に水平を保つ樣に兩拳を卸ろし木刀を左腕は九十度に保持し左手は人指を伸し拇指にて中指を覆ひ小指を締めて右手と釣り合ひ氣當りす之を圓相と云ふ又は實字體と云ひ圓快とも云ふ皆圓ろきかたちを云ふ

互に左足を踏出しつゝ右片手の木刀を初め披らき掛けたる時の如く頭上へ復し稍々右擘を伸して木刀を横一文字に翳しつゝ右足も踏出す之を半圓相と云ふ

敵手は俄然左足を踏出すと同時に木刀尖を地に觸れさる程に充分に右側の後方へ垂れて及を上へ向け其拇は右膂骨より少しく離し左手も添へて氣當りす之を斜と云ふ

武士は總へて敵手の擧動に應して其起り頭らに合するを要するものとす即ち左足を踏

出しつゝ左手を柄頭へ添へて一旦兵字に搆へ徐ろに右八相に搆ゆ

敵手は斜の搆へより大く振り上げつゝ右八相より打つ氣勢にて左足を引き切り結ふ

武士は右足を踏込むと同時に眞直く打込む共に之を×字切り結ふと云ふ

敵手は大く左足を引き右足も引き右掌に木刀の峯を挾み己れの右側後方へ振り込み右手を木刀の峯に沿ひ伸し腰を割りなから右足を踏出し摺り込むと同時に武士の胸を掬ひ上る武士は敵手のなせし如くし木刀を己れの右側後方へ振込み右足を踏出しつゝ敵手の掬ひ上る木刀を下へ押へ付る之を平ら十文字と云ふ

敵手は右手を柄へ戻すと同時に右足を引きつゝ少しく右側外へ踏移し左足も右足へ引寄せ稍々腰を割りつゝ木刀を右側後方へ徐ろに振り廻はし其刀尖を左方へ横々へ其刀及を上へ向け兩拳は自然に交叉し其兩拳は視線を避けて右側へ寄せ武士の眼線の下通りへ一文字に横々ゆ武士は右膝を上ると同時に木刀を右側後方へ轉旋し其木刀を吾が鼻筋通りに眞直く竪立して兩肘をゝボリ寄せ右足を踏卸ろし左足も其右足へ引寄せ悄然聳立して竪十文字に合はす（今は陰にして將さに陽に轉せんとする準備なりと知れ）

敵手は左足を左側外へ踏出し右足を少しく後方へ引きつゝ木刀を左側後方へ轉旋し右方へ横一文字に振り出し兩拳は左側へ寄せ額前へ一文字に横々ゆ

武士は右足を引きつゝ木刀を左側後方へ振り廻はし左膝を上げ上體を反りて兵字に搆へ其左足を踏付ると同時に柔らかに木刀を眞直く兩擘を伸し敵手の頭上へ乘せ込み平十文字に合せる之を氣を以て乘ると云ふ即ち兩踵を上げ丈伸ひする心持ちにす

敵手は右足を引きつゝ木刀を右八相に搆へ武士亦同時に右足を引きつゝ木刀を左側後方へ轉旋し兵字に搆へ左膝を上げ上體を反る

敵手は左足を引きつゝ武士の兵字に搆へたる左腕を引き切り兩拳は腰より少しく離して眼は武士に注きなから左側へ向きつゝ尚は多少兩足を摺り引きし柄頭は耻骨より離して其木刀尖は水平に眞直く差出して武士に打ゝせる用意をなす武士は左足を上げ居りなから右足を踏切て飛込みつゝ左足を踏付けると同時に右膝を上げ全く敵の眞向を一刀兩斷する所ろを素面なるが故に敵手の横に低く差出し居る木刀の中央へ打下すものなれは充分に精神を込めて打下すへし（若し打落されたる時は吾か兩股の間に轉入

する樣にし其木刀に頓着せす打落されたるまゝにて陰の圓相を畫くへし）

互に右足を左足へ引寄せつゝ向き合ひ初めに圓相に頭上にて開きたる如く兩拳を耻骨へ交叉して左右へ開き氣當りし徐ろに兩拳は自然に垂れ各左足より起して進退し元の地位に復す但し武士は元の線を越へて止り一歩踏出て元の地位に就くものとす

二　霞み要め

互に一歩踏出て木刀を精眼に搆へ多少氣當りし八相の初の如く圓相に開き直に左足を踏出すと同時に兵字に取り左手を柄頭へ添へ右足を左足へ引寄せ一應木刀を兵字搆へより卸ろして刀尖は地に觸れざる位ひに垂れサヨッと振上る之を霞ふと云ふ

敵手は左足を踏出すと同時に木刀を頭上へ冠り驅込みて右膝を上げながら刀尖を右方へ横たへ武士の胴通りへ横付けにす武士は敵手の木刀を頭上に冠ふるを見て直に左足を踏出しつゝ兵字に搆へ右膝を上げて敵手の横付けにしたる木刀に竪十文字に合はす敵手は跡へ武士は前へ竪十文字のまゝ位地を移しつゝ敵手はサヨッと木刀にて武士の木刀を押し離して充分に右足を引拔らき右八相に搆ゆ武士は徐ろに右足を前へにし踏

止り木刀を右側後方へ轉旋して其木刀尖を左方へ振出し敵眼に注き左足を踏出し全く側面向きに體をなし兩拳は交叉し吾が眼線の高さに保持し腰を割りて敵を睨む之を霞みと云

敵手は間合ひを見計らひ右足を踏込むと同時に右八相より眞直く打込む武士は霞みたる刀尖を左側後方へ轉旋しながら兩足は踏付けたるまゝ足の踵と甲との側端を地に付け外踝と外踝を向き合せる樣に上體を捻り廻はしつゝ稍々兩足を引寄せて挾くし扇要の體を造ると同時に木刀の刃を上へ向け左拳を左乳の下邊へ右拳を右乳の上邊へ接し其柄を抱込む持にし敵手の打込む木刀を拂ひ止む此の時釣り出され易きものなれど沈着すべし敵手は更に復た充分に右足を引拔らき右八相に搆ゆ武士は扇要の體より直に右足を踏出し右手の四指の甲へ木刀の平らを受け拇指にて挾み其峯を沿ひ伸ばし左肘は曲げてく字にしながら柄を引き攫く心持にて刀尖を敵手の心窩に注き氣當りす之を素攫（スゴク）の搆へと云互に八相の終りの如く陰の圓相を畫く等總べて異なることなし（以下始終共に八相に倣ふ）

三　轉化縱横

互に八相の初の如くし半圓相を畫きたる後ち敵手は斜に構ゆ武士は兩足を揃へたるまゝ兩擘を伸バし元低く刀尖高く敵眼に注く之を精眼と云ふ

敵手は斜の構へより徐ろに木刀を頭上へ取上げ兵字に構ゆ武士は精眼の構へより左足を踏出し斜に構ゆ（試合に於ても互に構へを異にし技倆を角するの意義を示すと云ふ）

敵手は右足を踏込と同時に武士の眞向へ打込む武士は右足を軸にし右膝を上げなから斜のまゝに己れの左方へ（敵手の打込木刀の平らを）打拂ひ落す

敵手は武士に打拂ひ落されたるまゝ木刀を左側へ取り武士亦其打拂ひ落したるまゝに眼は敵に注きなから左足を敵手の右足の外側へ踏込み木刀を左側へ取る

敵手武士同時に互ひの右腰を突き貫く心持にて擢出すと同時に左足を右足へ引寄せ過きて其左踵を右の趾前小趾の方へ踏込ひ

敵手武士共に木刀を左側後方へ轉旋すると同時に稍々體を捻りつゝ右足を引拔らく

敵手は左足を左側外へ振り廻はしなから後方へ引拔らきつゝ木刀尖を右方へ横タへ吾

が額前へ振出し一文字に横タゆ武士は右足を多少踏込み左足も右足へ引寄せつゝ平らに十文字に合せ踵を上げ丈伸して氣を以て乘る

敵手は右足を引きつゝ一應木刀を右八相に取る武士は徐ろに右足を引き兵字に構ゆ

敵手は左足を引きつゝ武士の兵字に構へ居る左腕を鋸斷する心持にて引き落し左側へ向き柄頭を耻骨より離して武士に打タせる用意をなす武士は敵手より吾か左腕を鋸斷する時左膝を上げ上體を反り而して敵手の木刀を耻骨へ横出したる時其左膝を上げなから右足を踏切り飛ひ込みつゝ左足を踏付ると同時に敵手の横出したる木刀を敵手の眞向と假想して一刀兩斷し右膝を上げ敵手亦右膝を上ぐ

敵手は左側と後方の間に飛退り刀尖を武士の眼に注く武士は左側と前方の間に飛込みつゝ多少敵手の首を薙る心持にし刀尖を敵手の眼に注く

互に木刀を左側後方へ轉旋しつゝ敵手は右足を引退り武士は飛ひ込て左足を前にし×字形に切り結ひ尙ほ右足を蹴り上げなからチョンチョンと進み迫る敵手亦間合ひに應して同しくチョンチョンと跡退りす

敵手は木刀を左側後方へ轉旋し稍々兵字に搆へ一節を保ち打出しつゝ左足を引く武士亦左膝を上げなから木刀を左側後方へ轉旋し兵字に搆へ左足を踏付けて右足を踏込むと同時に×字形ゑ切り結ふ終りは前同斷

四　切り落し

互に二本目の初の如くし一應窺ひ兩足は其儘にて兵字に取り又徐ろに卸ろして再應窺ふ敵手二本目の如くし驅込て木刀を横付けにす武士は木刀を竪×文字に合はす

敵手退く武士進む敵手はチョッと木刀にて武士の木刀を押し離し左足を引き又左足を踏込むと同時に武士の右足の内側を薙る武士は左足を退き木刀にて外へ打拂ひ合せる

敵手は木刀を右側後方へ轉旋し左足を踏込むと同時に武士の左足の内側を薙る武士は右足を引きなから木刀にて外へ打拂ひ合せる

互に引き分れつゝ右側へ向き霞みて木刀尖を眼に注き右足を浮へ木刀を突出し又右足を引き互に木刀を左側後方へ轉旋し敵手は打出しつゝ左足を引く武士は左足をチョッと踏込み右足を深く踏込むと同時に眞直く打込み×字形に切り結ふ

又互に引分れつゝ互に精眼に搆へ敵手は踏込みつゝチョッと木刀を振り上げ武士の眞向へ打込む敵手は木刀尖を吾か左方へ横々へ受止めつゝ兩足を踏切イ其兩足を武士の左側の外方へ移す敵手は賺されたるに依り稍々上体を前方へ傾け木刀尖を地に垂る武士は敵手の首を切り落す擬勢をなす是亦氣を以て乘るを要す

互に徐ろに復た引分れつゝ敵手は精眼に搆へ武士は兵字に搆ゆ

敵手は平生歩む如く進みつゝ木刀尖を長圓形にうねり間合ひを見計ちひチョッと木刀尖を振上げ木刀尖の鋭角を隆準の下邊へ打込む心持にて武士の腮より喉頭部を經て凹き所の頸窩へ落し込む樣に兩手の諸爪を上へ向け兩肘をシホリ寄せつゝ多少兩足を摺り込み殊に左腰を前へ振出して据へ込み木刀を眞直く水平に捧持す是れ突く擬勢なり

武士は兵字搆へのまゝ左足を吾が左側と前方の間に踏移すと同時に左掌にて敵手の木刀は平らを拍て吾か右腋の方へ拂ひ除け右足を左踵の後方へ引拔らく敵手亦武士に拍ち拂はれたるまゝ木刀尖を垂れて左足を吾か前方へ踏移しつゝ右拳を少しく轉回し左掌は峯に沿ひ伸し木刀を右腰へ搆へて摸く體をなし右足を左踵の後方へ引拔らき互に

入り替る武士は木刀を左側後方へ轉旋し左手を添へて兵字に搆へつゝ左膝を上げて上體を反り稍々一節を保ち右足を踏込むと同時に眞向へ打込む擬勢をなす敵手は擴く體のまゝ捧げて受止む

敵手は左手を柄頭へ戻して精眼に搆へ武士は木刀を右側後方へ轉旋し兵字に搆へ互にッケ、ウテと云ふ氣位を取て相迫る所謂氣當り是れなり

敵手次第々々に跡退りす武士は敵手の跡退りするに追ひ迫り往く

敵手は跡退りつゝ吾か元の地位に復し左足をつき木刀尖を疊に垂る武士は切り聲掛けて右足を高く上げ其右足を敵手の柄の邊へ踏込み切り落さんとす敵手降參りと叫ふ武士は徐ろに木刀を精眼に取りつゝ跡退りす敵手亦徐ろに立つ是に於て終る終は前同斷

互に兩足は揃へたるまゝ兩手を左右より頭上へ上げ木刀を兵字に取り又徐ろに木刀を精眼に卸ろし左手にてチョッと袴を繰り右片手にて木刀を握り刀を左方へ向け木刀は水平に胸の邊へ保ち各左足より起して進退し當初の如くす

武道教範第三篇 大尾

蘊奥何知未上堂
裘箕紹述報先王
恭然氣宇如山嶽
劍戟相摩放電光

明治二十有八年一月元旦

於新台領地金州城冬營

陸軍憲兵大尉（從七位勲五等）隈元實道

明治二十八年四月十日印刷
明治二十八年四月十四日發行
明治二十八年七月一日再版印刷發行
明治二十八年十月十一日校訂三版印刷
明治二十八年十月十五日校訂三版發行

定價金五十五錢

版權所有

編著者　鹿兒島縣士族　隈元實道
東京市赤坂區永川町五十一番地

發行者　大多和勝忠
東京市京橋區南小田原町四丁目一番地

印刷者　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發兌　武揚館
東京市京橋區南小田原町四丁目一番地

72
b
215

終